

送水管沼南～我孫子線 埋蔵文化財調査報告書

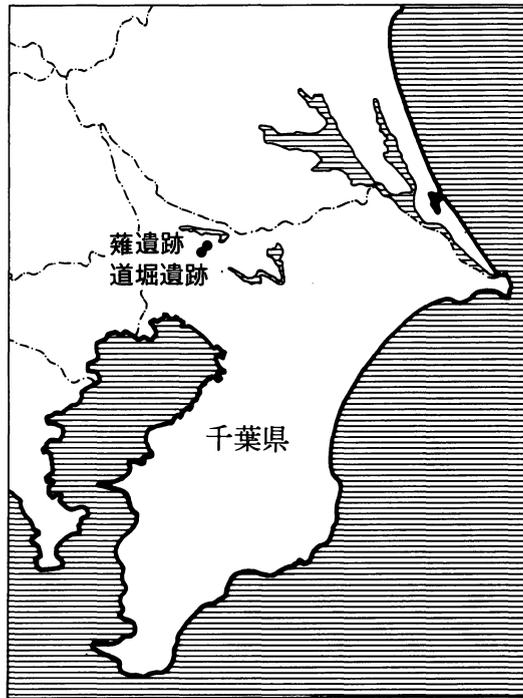
沼南町道堀遺跡・薙遺跡

平成10年3月

北千葉広域水道企業団
財団法人 千葉県文化財センター

送水管沼南～我孫子線 埋蔵文化財調査報告書

しょうなん みちほり なぎ
沼南町道堀遺跡・薮遺跡



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第329集として、北千葉広域水道企業団の送水管沼南～我孫子線布設工事に伴って実施した東葛飾郡沼南町道堀・薙遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、後期旧石器時代から古墳時代にかけての集落が発見されるなど、この地域の古代の生活を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また、文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は北千葉広域水道企業団による送水管沼南～我孫子布設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は下記の2遺跡である。
千葉県東葛飾郡沼南町岩井字道堀288-3番地ほか 道堀遺跡（遺跡コード 305-007）
千葉県東葛飾郡沼南町箕輪字雑263-12番地先 雑遺跡（遺跡コード 305-008）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、北千葉広域水道企業団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査部長 西山太郎、北部調査事務所長 折原繁の指導のもと副所長 田村隆、主任技師 竹田良男が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成9年4月1日～平成9年7月9日、平成9年11月17日～平成9年11月28日
整理作業 平成9年6月16日～平成9年9月30日、平成9年11月1日～平成9年11月14日
- 5 本書の執筆は、副所長 田村隆が行った。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、北千葉広域水道企業団、沼南町教育委員会の御指導・御協力を得た。
- 7 本書には、国土地理院発行 1/25,000地形図「取手」(N1-54-19-13-4)を使用した。
- 8 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。

本文目次

序章	1
第1節 調査の経緯と方法	1
第2節 遺跡の環境	1
1 地理的環境	1
2 考古学的環境	6
第1章 道堀遺跡	10
第1節 旧石器時代	10
1 第1地点	10
2 第2地点	10
3 第3地点	10
4 第4地点	11
5 第5地点下層	11
6 第5地点上層	15
7 第6地点	19
8 その他の遺物	20
第2節 縄文時代	21
1 住居跡1	21
2 ピット群1	32
3 土坑	32
4 遺物包含層	35
第3節 弥生時代以降	38
第2章 雑遺跡	39
第3章 まとめ	42
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	第7図 道堀遺跡土層堆積状況
第2図 調査区と周辺の地形	第8図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図(第1・2・3地点)
第3図 調査区周辺の考古学的環境	第9図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図(第5地点下層)
第4図 基本土層	第10図 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図(第5地点下層-1)
第5図 道堀遺跡全体図(1)	
第6図 道堀遺跡全体図(2)	

- 第11図 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図（第5地点
下層-2）
- 第12図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図（第5地点
上層）
- 第13図 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図（第5地点
上層）
- 第14図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図（第6地点）
- 第15図 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図（第1・2
・3・5・6地点）
- 第16図 道堀遺跡住居跡1平・断面図
- 第17図 道堀遺跡住居跡1遺物出土状況
- 第18図 道堀遺跡住居跡1出土遺物（1）
- 第19図 道堀遺跡住居跡1出土遺物（2）
- 第20図 道堀遺跡住居跡1出土遺物（3）
- 第21図 道堀遺跡住居跡1出土遺物（4）
- 第22図 道堀遺跡住居跡1出土遺物（5）
- 第23図 道堀遺跡住居跡1出土遺物（6）
- 第24図 道堀遺跡ピット群1平・断面図（1）
- 第25図 道堀遺跡ピット群1平・エレベーション
- 第26図 道堀遺跡土坑平・断面図（土坑1～5）
- 第27図 道堀遺跡遺物包含層の遺物（1）
- 第28図 道堀遺跡遺物包含層の遺物（2）
- 第29図 道堀遺跡遺物包含層の遺物（3）
- 第30図 薙遺跡全体図
- 第31図 薙遺跡住居跡1平・断面図（上）、遺物実測
図（下）

図版目次

- 図版1 道堀遺跡遠景、道堀古墳、旧石器時代第5
地点
- 図版2 住居跡1（西方から）、住居跡1（東方か
ら）、ピット群1
- 図版3 土坑2、土坑3、住居跡1出土遺物（1）
- 図版4 旧石器時代第5地点下層出土遺物
- 図版5 旧石器時代第5地点下層・同上層出土遺物
- 図版6 旧石器時代第5地点上層・各地点出土遺物
- 図版7 住居跡1出土遺物（2）
- 図版8 住居跡1出土遺物（3）
- 図版9 住居跡1出土遺物（4）
- 図版10 遺物包含層出土遺物（1）
- 図版11 遺物包含層出土遺物（2）
- 図版12 薙遺跡遠景、住居跡1、住居跡1出土遺物

表目次

- 第1表 第1地点石器属性表 10
- 第2表 第2地点石器属性表 10
- 第3表 第3地点石器属性表 11
- 第4表 第4地点石器属性表 11
- 第5表 第5地点下層石器属性表 11
- 第6表 第5地点上層石器属性表 16
- 第7表 第6地点石器属性表 19

序 章

第1節 調査の経緯と方法

北千葉広域水道企業団は、上水道整備事業の一環として、沼南町鷲野谷から箕輪を經由して箕輪新田に至る送水管の布設を計画した。これに伴ない平成8年度に送水管布設予定地内の埋蔵文化財の所在の有無について、千葉県教育委員会あてに照会がなされたが、予定地内には5か所にのぼる周知遺跡が所在し、この取扱いをめぐり、事業者である北千葉広域水道企業団と、県文化課2者間での事前協議が行なわれることになった。

再三にわたる協議の結果、シールド工法部分は埋蔵文化財への影響が軽微であるため慎重工事の扱いとされたが、オープン・カット工法部分については工程の変更は不可能であり、かつ事業の公共性と緊急性に鑑み、記録保存の処置がとられることになった。記録保存部分は周知の道堀・薙両遺跡を含む2か所であり、総面積は1,302㎡である。その後、道堀遺跡について50㎡の追加があり、最終的な調査面積は1,352㎡となった。その内訳は、道堀遺跡1,286㎡、薙遺跡66㎡である。

なお、シールド工法竪坑部分については、平成8年度内に工事を終了する必要があるため、沼南町教育委員会を調査主体として緊急に発掘調査が実施されたが、遺構の検出はなく、予定どおり年度内に工事が実施されている。この竪坑は、今回発掘調査が実施された薙遺跡の調査区北側に位置する。

発掘調査は平成9年4月1日に着手し、工事の工程上の都合による中断をはさんで、同年11月28日に終了した。なお、遺跡ごとの調査期間は下記のとおりである。

道堀遺跡 平成9年4月1日～平成9年7月4日

薙遺跡 平成9年4月1日～平成9年7月4日 (28㎡分)

平成9年11月17日～平成9年11月28日 (38㎡分)

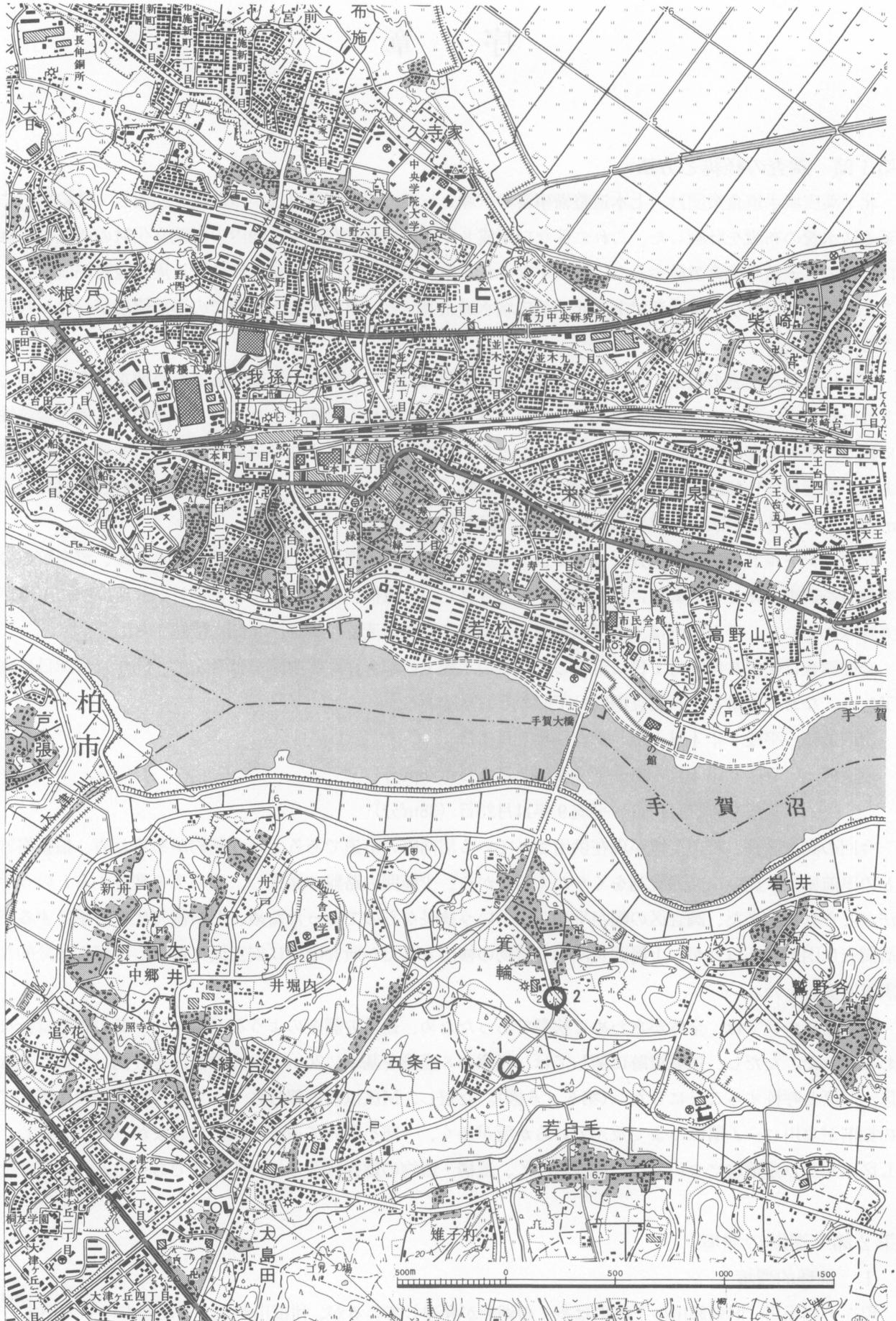
今回の調査区は、その全域が現在供用されている沼南町の町道であるという制約があるため、柏警察署との事前協議に従い、交通規制をくりかえしながら、少範囲の路盤を撤去し、その下を調査するという手法がとられた。また、調査区の幅が平均2mという狭長なものであったため、旧石器時代を対象とする下層調査は困難であったが、上層調査段階で遺物の検出されたか所を中心に安全面に留意しながら部分的な調査を実施した。

調査区については、全体がきわめて狭長であったため、通常の調査のような基本グリッドの設定は行なわなかった。ただし、道堀遺跡に関しては、任意のx座標を基準に20mごとに調査区を分割し、これをA区～V区と呼称することにした。(第5・6図)。ただし、M区以南の部分については、町道建設に際しての掘削が立川ローム層深くまで及んでいるか所が多く、一部を除いて遺構は検出できなかった。しかし、L区以北及び薙遺跡については、掘削は浅く、遺構・遺物の遺存状況は比較的良好であった。

第2節 遺跡の環境

1 地理的環境

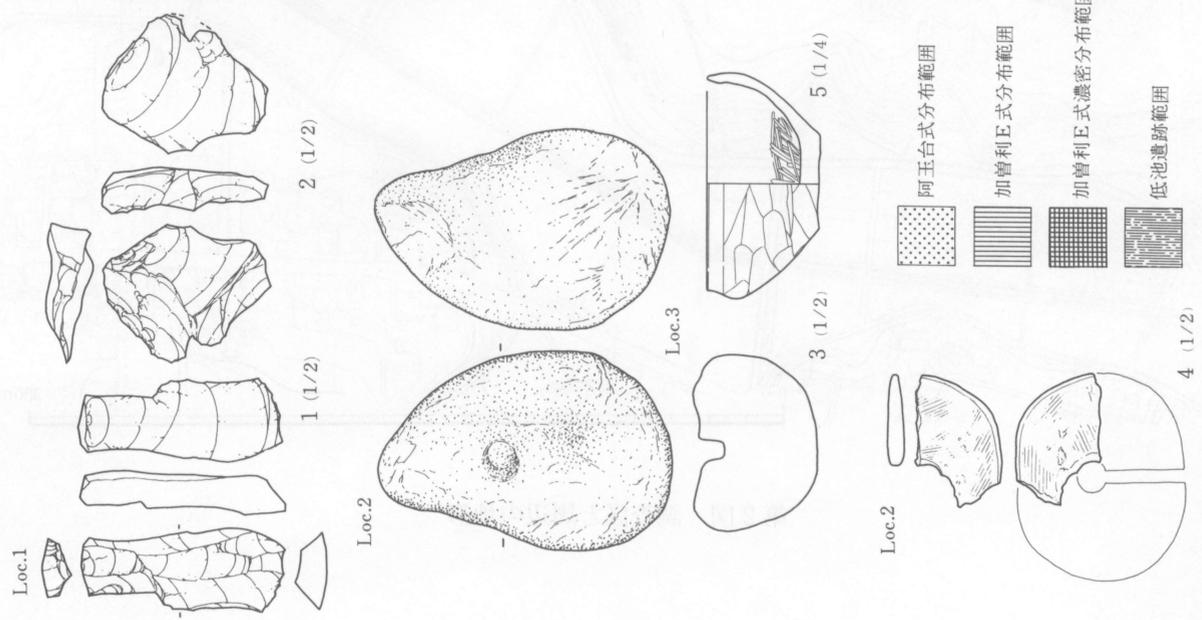
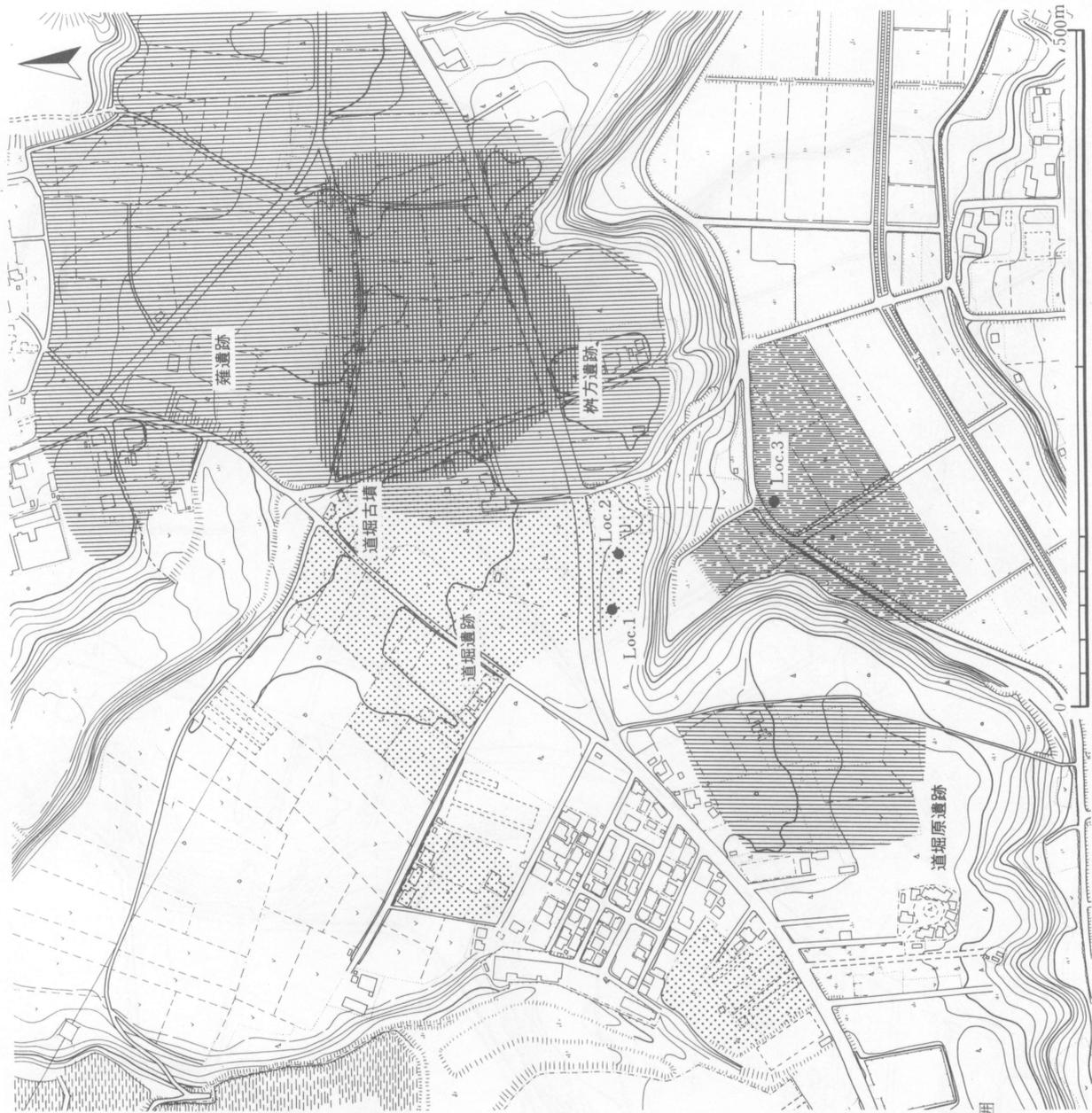
現在の利根川、旧鬼怒川の下流には多くの湖沼が発達しているが、利根川が大きな屈曲をみせる旧木下^{きおろし}



第1図 遺跡の位置(1：道堀遺跡2：薙遺跡)



第2図 調査区と周辺の地形



第3図 調査区周辺の考古学的環境

がし
河岸の西には手賀沼が東西に横臥している。この手賀沼の北側、利根川にはさまれた東西に細長い台地上には我孫子市の市街地があるが、沼の南側に、あたかも我孫子市と対峙するかのように東葛飾郡沼南町が位置している。

沼南町は面積41.99km²、人口約4.5万人であり、東葛地区有数の畑作地帯として知られているが、近年は首都圏のベッド・タウンとして宅地開発が著しい。町の北側には手賀沼低地がひろがり、東側も下手賀沼に画される。また西側は鎌ヶ谷市北部に発する大津川によって柏市と、南側は下手賀沼に注ぐ「金山入り落とし」とよばれる河谷によって印旛郡白井町及び印西市と区画されている。

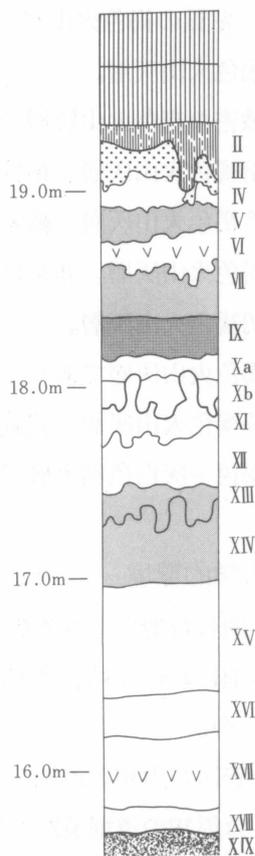
このように沼南町の主要部分な、湖沼と主要河谷により四囲をとり囲まれた広大な洪積台地によってかたちづけられているとあってよいが、この台地は町の中央を西から東へと流下し手賀沼に注ぐ「染井入り落とし」とよばれる河谷によって北部台地と南部台地とに区分することができる。さらに、「金山入り落とし」と「染井入り落とし」にはおもに南北方向に発達する多数の小支谷が合流し、平坦な台地は複雑な陰翳にいろどられることになる。

沼南町の現在の景観は多様化している。手賀沼低地と3本の主要河谷の沿岸は水田がひろがるが、台地斜面部は落葉広葉樹林に広くおおわれている。一方、台地上には葱や葉ものを主体とする畑地、さらに東葛地区の特産品である梨園も散見される。杉の疎林なども各処に残され、今なおかつての下総台地の風情を色濃くとどめているが、町を南北に貫ぬく国道16号線や、これと直交する県道船橋我孫子線、あるいは町の西端を通過する東武野田線沿線には商業地や宅地が徐々にひろがりをみせつつある。

さて、道堀、薙両遺跡もこのような地理的環境におかれている。巨視的にみれば、遺跡は「染井入り落とし」と手賀沼とにはさまれた東西に延びる洪積台地上にあるといえるが、両者間には箕輪の集落と五条谷の集落とを区切る支谷が介在し、それぞれは独立した小台地の観を呈している。この支谷の谷頭部は、造成工事や埋め立てによって既に旧態をうかがうことはできないが、かつては道堀遺跡A区の東北部に存在したといわれている。両遺跡はちょうどこの谷頭部を結節点として、支谷をはさんで南北に対面するような位置関係にある。

一方、道堀遺跡南半はN区からL区のあたりで「染井入り落とし」へ注ぐ別の支谷の谷頭部を南北に縦断し、さらにU・V区あたりでは手賀沼に向う五条谷支谷の谷頭を東西に横切っている。このように、今回の道堀遺跡の調査区は、台地の分水嶺上をたどるよう設定されており、台地と小支谷とが反復する複雑な様相をみせているといえるだろう。なお、この経路は古くから松戸方面と成田方面を結ぶ往還としても利用されていたらしく、処々に近世の道標が残されている。

最後に遺跡の基本土層について確認しておく(第4図)。今回の調査範囲はその全域が現道であったため、本来の土層を全層にわたって観察できるか所はなかったが、最も遺存状況のよかった道堀遺跡J区を基準としておきたい(基本土層位置は第5図参照)。



第4図 基本土層

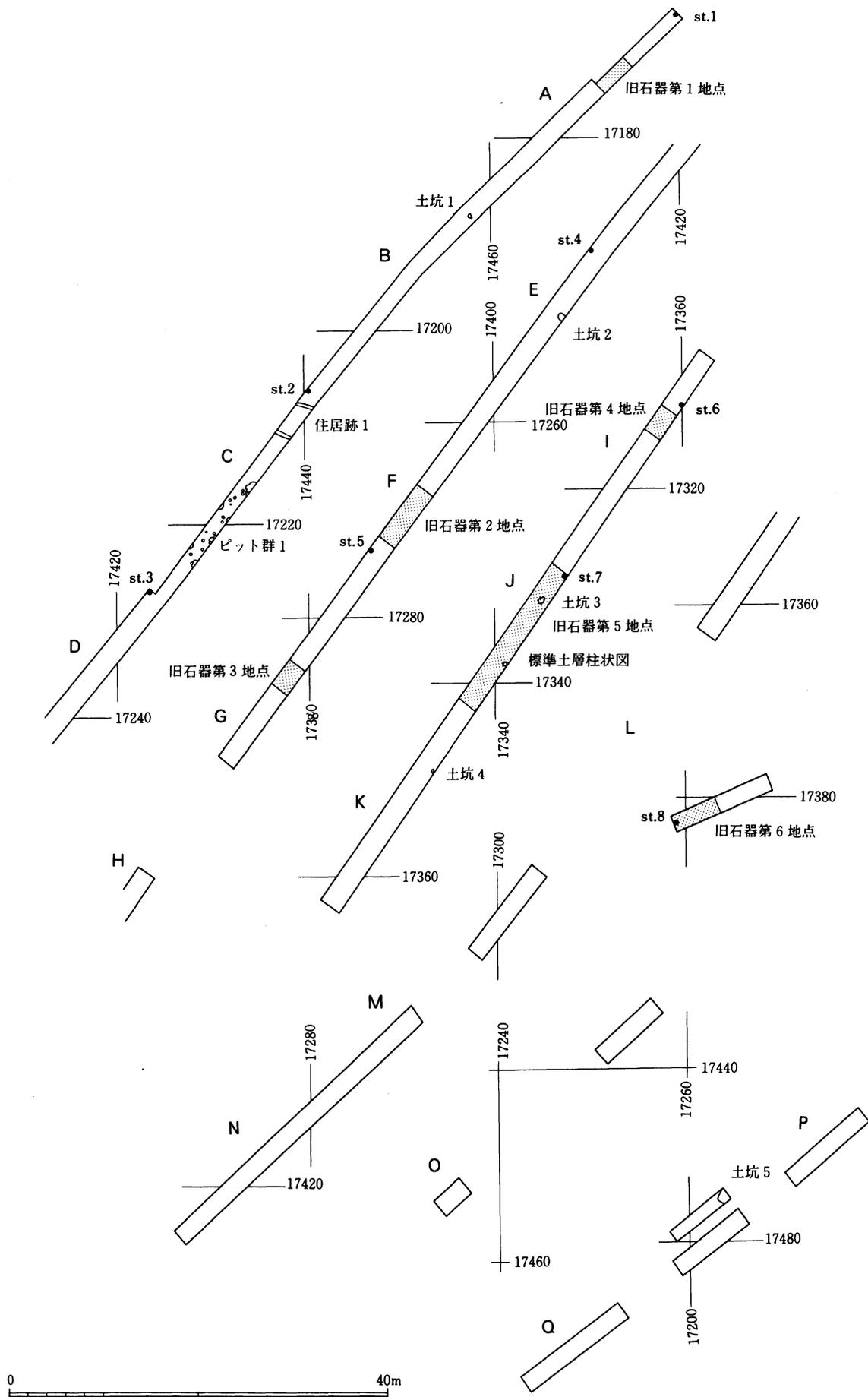
(スクリーン・トーンの種類は全図共通)

- I層 通常は表土層を本層とするが、本地点では既に削平を受け観察できなかった。
- II層 黒味の強い褐色火山灰層であり、一部を削平され、本来の層厚は不明である。縄文土器が包含されている。
- III層 黄褐色火山灰層で、いわゆるソフト・ローム層である。本地点では細分されていないが2層に分離される。
- III_a層 黄色味が強く、褐色土粒が斑紋状に混入する。
- III_b層 やや沈んだ色調を呈し、下位にハード・ローム粒が包含される。
- IV層 明褐色火山灰層でいわゆるハード・ローム層のトップの層準となる。
- V層 褐色火山灰層であり、第1黒色帯に対比される。本地点ではIV層と明確に区分されたが、明瞭な区分のできないところも多い。
- VI層 明褐色火山灰層であり、始良T_n火山灰を包含している。硬質で粘性を欠く。
- VII層 スコリア質褐色火山灰層で、VI層と近似した明褐色火山灰を斑紋状に含む。第2黒色帯の上部層に対比される。
- IX層 スコリア質暗褐色火山灰層である。本地点では細分できなかったが、色調に着目して黒味の強い下部 (IX_c層) と、淡色の上部 (IX_a層) に分けられている。また、明褐色の間層帯 (IX_b層) が区別される場合もある。第2黒色帯の下部層に対比される。
- X層 褐色火山灰層で粘性に富む。本地点では2枚に細分された。
- X_a層 スコリア質褐色火山灰層
- X_b層 粘質の褐色火山層で本層から下部にクラックが発達する。立川ローム層の基底となる。
- XI層 褐色火山灰層。くすんだ色調を呈し粘性が強い。乾燥するとクラックが著明となる。
- XII層 緻密な褐色火山灰層で層状に堆積するがXI層とXIII層の間にブロック状に介在する場合もある。
- XIII層 暗褐色火山灰層。粘性を帯びXIV層との境界は波状帯となる。黒色帯上部軟質部に相当する。
- XIV層 暗褐色火山灰層。緻密な土層で黒色帯下部硬質部に相当する。
- XV層 褐色火山灰層。非常に緻密な土層で0.6mという厚い層厚を確認した。
- XVI層 明褐色火山灰層。
- XVII層 褐色火山灰層であり、TPを含む。砂質で硬い。
- XVIII層 茶褐色火山灰層。武蔵野ローム層の基底層である。
- XIX層 褐色～灰白色粘土層で、常総粘土層のトップとなる。

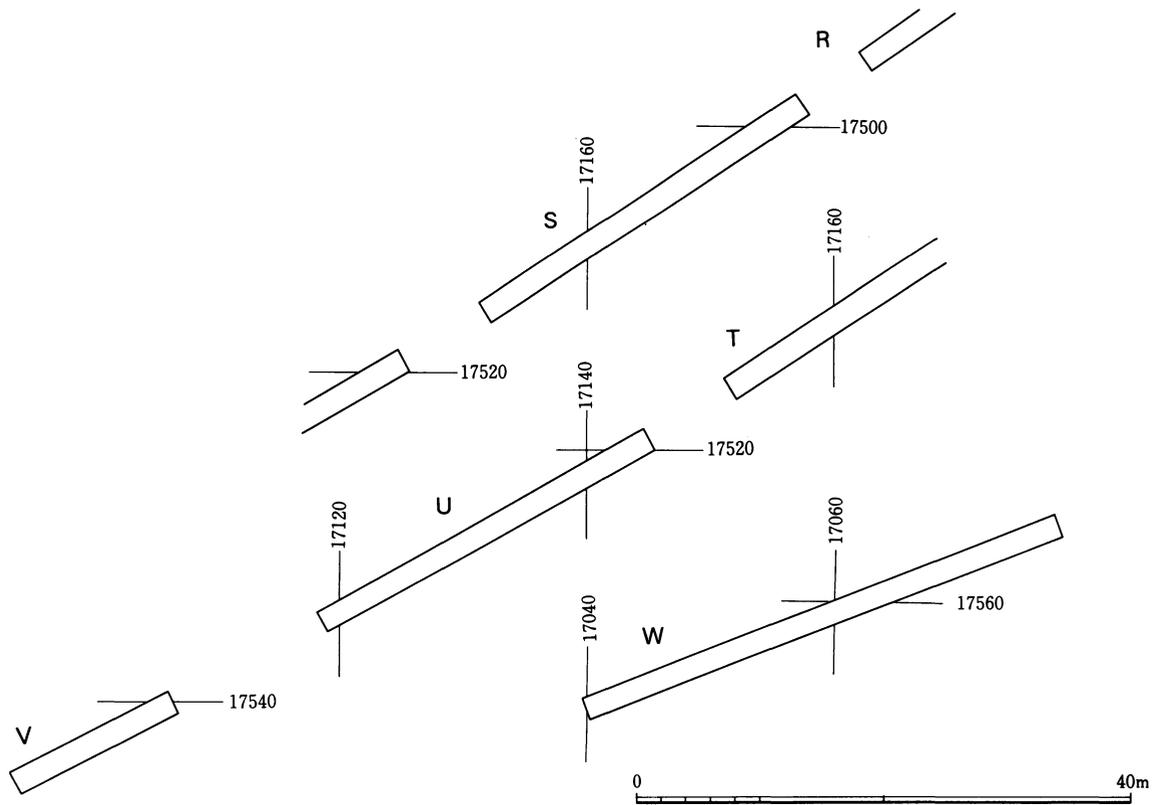
2 考古学的環境

手賀沼を囲む台地上には多数の遺跡があるが、その詳細は『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)』に譲ることとし、本項においては、発掘調査と併行して実施した調査区周辺の分布調査の成果についてふれておきたい(第3図)。

今回の調査区が周知の道堀、薙遺跡の一角を占めることは既にふれたとおりであるが、厳密には、道堀遺跡調査区は周知の道堀遺跡と柵方遺跡、道堀原遺跡との境界部分を東西に通過している。また、それは周知の道堀古墳の墳丘北側を通過しているが、今回の発掘調査においては古墳と関連する遺構、遺物の検出はなかった。



第 5 図 道堀遺跡全体図(1)



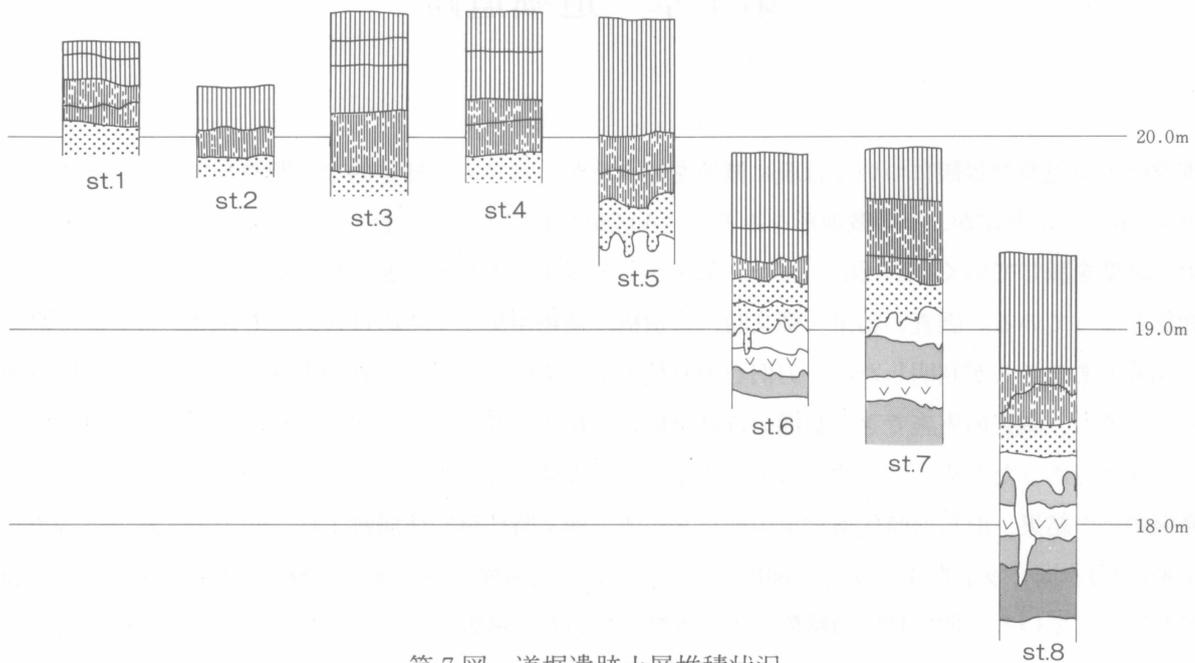
第6図 道堀遺跡全体図(2)

道堀、柵方、道堀原の各遺跡はいずれも縄文時代遺物包蔵地として知られている。薙遺跡も縄文時代遺物包蔵地として周知されてきたが、古墳時代の遺物の散布も注意されていたようである。事実、発掘調査の結果はこのような従来の知見を裏付けるものであった。分布調査の結果を第3図にまとめたが、いくつかの注目すべき成果が得られている。

(1) 縄文時代中期前半、特に阿玉台式土器は道堀遺跡の範囲内及び道堀原遺跡北側、柵方遺跡西側の一部などに広く分布している。全般に遺物の散布は密とはいえないが、今回調査した範囲から「染井入り落とし」へ注ぐ小支谷谷頭部にかけてはやや濃密化する傾向がうかがわれる。また、この分布範囲と一部重複して縄文時代前期中葉の遺物も少量認められた。

(2) 縄文時代中期後半、特に加曾利E2～3式土器は柵方遺跡から薙遺跡にかけて広く分布している。就中、柵方遺跡中央部の分布はきわめて濃密であり、おびただしい量の土器片、黒曜石剥片が散布している。町道に接して深土耕された畑地においては、住居跡かと推定される黒色土の落ち込みが多数視認され、膨大な量の土器片の散布と相まって、住居跡の群在する集落跡の存在が予測された。一方、薙遺跡での散布は希薄であるが、スポット的にやや密な部分が点在している。

(3) 柵方遺跡と道堀原遺跡との間には「染井入り落とし」へ流下する小支谷が認められるが、この支谷を中心とする水田面にも広範囲に各種の遺物が散布する。散布遺物には縄文中期後半の土器片が多いが、水路工事に伴って土師器の完形品(第3図5)を採集した。この遺跡を柵方低地遺跡と仮称しておくことにしたい。なお、今回実施した分布調査によって、同様の低地遺跡が岩井貝塚南方の水田面にも存在する



第7図 道堀遺跡土層堆積状況

ことも明らかとなり、「染井入り落とし」流域には多数の低地遺跡が存在する可能性がきわめて高い。同様の低地遺跡は手賀沼低地においても確認されており、本地域における遺跡分布は抜本的な見直しを迫られることになろう。

(4) 新たに旧石器時代の遺物散布地が1か所発見された。天地返しされた畑地(第3図Loc.1)から石刃や剥片などを採集した。第3図1、2にその一部を図示したが、石器のつくり方から本来は第2黒色帯を産出層準とするものと推定される。なお、両者は黒色緻密質安山岩の同一母岩であり、1が石刃、2は打面再生剥片である。他に磨痕のある剥片など若干を採集した。

(5) その他に、第3図Loc.2から注目すべき資料を採集した。第3図3は硬玉原石であるが、片側に未貫通の浅い円孔があり、硬玉製大珠未製品と考えられる。第3図4は塊状耳飾の破片である。石質は蛇紋岩とみられる。なお、この地点には阿玉台Ib式(多)と黒浜式(少)が散布するが、これらとの共伴関係は不詳である。ただし、3は採集場所に接する地境の崖面に阿玉台Ib式土器を含む黒色土の落ち込みが観察され、あるいはこれに伴ったものであるのかもしれない。

第1章 道堀遺跡

本遺跡の環境及び景観については既に概要を述べたが、はじめに補足的な説明をしておく。調査区は地上600m以上に及ぶが、その微地形をみると、A区からF区までは大むね平坦であり、G区からL区まで次第に高度を減じていく(第8図)。また、M区からS区まで再び平坦となり、T区～V区間は五条谷の緩斜面部となっている。調査の結果、縄文時代の遺構、遺物が集中するのはA区～F区間の最も海拔高度の高い部分であることが判明した。一方旧石器時代の遺物集中地点は、調査の実施できなかったM区以西は措くとしても、調査の実施できた範囲のほぼ全域に点在する傾向がうかがわれた。ただし、調査範囲が余りにも狭長であったため、この傾向はあくまでも参考程度にとどめておくべきであるかもしれない。

発掘調査の結果、旧石器時代遺物集中地点6か所、縄文時代竪穴住居跡1軒、同土坑5基(不確実なもの1基含む)、同ピット群1か所等が検出された。また、遺構検出時に縄文土器、石器、弥生土器、土師器なども出土している。他にU区の路盤直下に堆積していた武蔵野ローム層中らからチャートの破片若干を得たが、遺物と断定することができなかったため本報告からは除外した。

第1節 旧石器時代

1 第1地点(第8図・15図)

A区にある。本地点は調査区の北端部であり、手賀沼に注ぐ小支谷谷頭部を臨む斜面を登りつめたところにあたる。黒曜石の剝片1点、碎片2点が近接して検出された。産出層準に関しては、本地点の周辺がハード・ローム層にまで削平が及んでいたため明確ではないが、3点の資料はハード・ローム層の上部から出土されている。

No.	遺物番号	分類	遺存状況	長×幅×厚(mm)			重量(g)	打面	打長×幅(mm)	打角(°)	背面構成	縁辺角(°)			刃角(°)	末端	石材
				R	M	L											
1	7AP-1	剝片	折	15.4	22.2	4.6	1.30	P ₁	10.3×2.4	109	HR	31		14		-	黒曜石
2	2	碎片		10.8	12.9	2.1	0.28										黒曜石
3	3	碎片		10.1	10.6	3.9	0.25										黒曜石

第1表 第1地点石器属性表

(注) 属性表の見方

1. 打面は自然面打面(C)、平坦打面(F)、複剝離打面(P₁)、縁状打面(L)、点状打面(P₂)の5種に分類する。
2. 背面構成は、自然面(N)、節理面(F)、長軸上部から(H)、長軸下部から(B)、長軸右方から(R)、長軸左方から(L)、背面と垂直方向から(V)の7種に分類する。
3. 末端形状は、羽状(F)、階段・蝶番状(H)、抜端(O)の3種に分類する。

2 第2地点(第8図)

F区III b層からチャートの破片が1点出土した。周辺を拡張調査したが追加資料は得られなかった。

No.	遺物番号	分類	遺存状況	長×幅×厚(mm)			重量(g)	打面	打長×幅(mm)	打角(°)	背面構成	縁辺角(°)			刃角(°)	末端	石材
				R	M	L											
1	7BP-1	破片		3.8	8.5	1.8	0.06										チャート

第2表 第2地点石器属性表

3 第3地点(第8・15図)

G区の上層遺構検出作業中に黒曜石製の有背尖頭刃器(第15図4)が採集されたため、ローム層を掘り下げたところハードローム層上部から黒曜石製の剝片(同3)が1点出土した。有背尖頭刃器は原礫面付

き横長剥片の一端に細部加工が認められる。素材の黒曜石は夾雑物を含む灰黒色のもので、漆黒を呈する3とは異なっている。

No	遺物番号	分類	遺存状況	長×幅×厚(mm)			重量(g)	打面	打長×幅(mm)	打角(°)	背面構成	縁辺角(°)			刃角(°)	末端	石材
				R	M	L											
1	7C5	有背刃器	完	27.2	12.4	4.5	1.50				CH				57		黒曜石
2	7C8	剥片	折	21.5	30.0	8.4	5.03	-			H	54		66		F	黒曜石

第3表 第3地点石器属性表

4 第4地点

I区上層遺構精査時に黒曜石製剥片1点を採集したため、周辺のローム層を掘り下げたが追加資料は得られなかった。

No	遺物番号	分類	遺存状況	長×幅×厚(mm)			重量(g)	打面	打長×幅(mm)	打角(°)	背面構成	縁辺角(°)			刃角(°)	末端	石材
				R	M	L											
1	7CP1-1	剥片	完	12.5	12.3	5.5	0.65	F	6.5×1.1	-	B	85	-	36		O	黒曜石

第4表 第4地点石器属性表

5 第5地点下層(第9~11図)

J区から検出された。調査区の幅が2mと狭く、遺物の散布範囲の捕捉はできないが、未調査区にさらに広がるように見える。また、遺物集中範囲の北方4mほど離れたところからチャートの剥片が1点検出されており(第12図)、調査区周辺にはさらに多くの集中地点が埋没している可能性が高い。遺物の産出層準はVII層最上部~上面と考えられる。

回収された石器群の組成は、有背石刃1点、石刃7点、剥片2点、碎片5点、石核1点合計16点となる。石材組成は黒曜石15点、珪質頁岩1点であり、黒曜石が卓越している。この他に単独出土のチャート製剥片が1点ある。

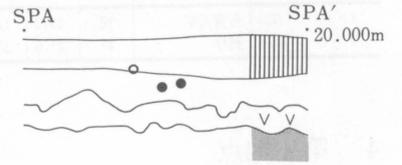
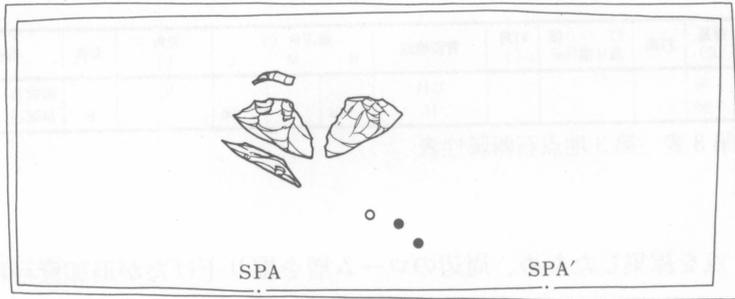
16点の資料のうち8点が接合した。接合資料の内訳は、石核1点(第10図1)、石刃5点(同1a:1b:1c:1d、第11図3)、剥片1点(第10図1b)、碎片1点(同1e)であり、石核からの一連の石刃生産過程を示している。

ブランクの基本的形態は三角柱である。三角柱の正面が石刃剥離作業面、両側面が原礫分割面、上面が打面、下面が底面になる。原礫分割面は両面ポジ面であり、底面は角礫原礫面が小さく遺存している。原石は黒色で夾雑物を全く含まない良質の黒曜石角礫で、岩帯近傍で採集されたものと考えられる。ブランクは角礫を分割することから開始される。分割はQuarried bipolar technique とよばれる手法によるもの

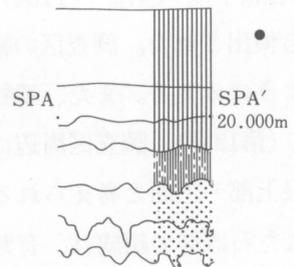
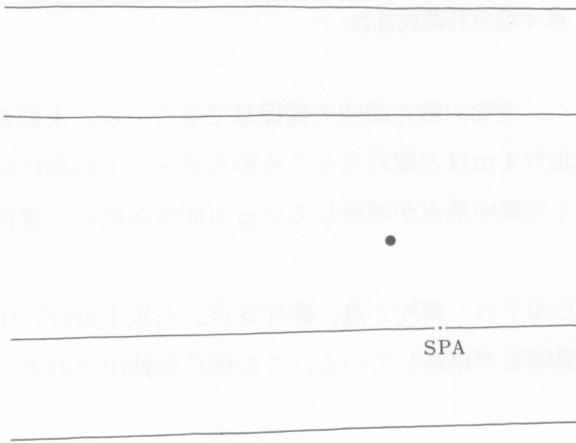
No	遺物番号	分類	遺存状況	長×幅×厚(mm)			重量(g)	打面	打長×幅(mm)	打角(°)	背面構成	縁辺角(°)			刃角(°)	末端	石材
				R	M	L											
1	7CP3-1	剥片	折	14.0	11.3	2.0	0.19	-			H	21		22		-	黒曜岩
2	2	使用痕つき石刃	完	52.0	6.6	7.4	4.02	P	11.2×2.1	9.7	HB	34		45	34 45	O	黒曜石
3	3	使用痕つき石刃	折	37.1	10.0	4.1	1.25				H	34		39	39 34	F	黒曜石
4	4	碎片		21.5	5.9	1.9	0.13										黒曜石
5	5	石刃	完	50.2	16.7	9.3	6.83	P ₁	13.6×5.13	85	HR	21		26	21 26	O	黒曜石
6	6	石刃	完	33.2	6.9	3.0	0.62				H			31	18	H	黒曜石
7	7	有背石刃	折	71.7	25.0	11.5	15.45	P ₁	19.5×12	87	H	75		42	31 42	-	珪質頁岩
8	8	碎片		13.4	13.5	4.4	0.64										黒曜石
9	9	碎片		6.0	11.9	2.3	0.14										黒曜石
10	10	使用痕つき剥片	折	39.2	13.0	10.1	3.04	F	9.6×4.5		H				尖端		黒曜石
11	11	使用痕つき石刃	完	44.0	26.3	8.7	9.74	P ₁	12.1×1.2		H	77		33	37	O	黒曜石
12	12	剥片		7.1	10.2	3.2	0.16	1		1							黒曜石
13	13	石刃	折	21.3	14.8	3.7	1.27	-		1	1	HB	45		65		黒曜石
14	14	剥片		10.5	4.2	1.3	0.05										黒曜石
15	15	使用痕つき石刃	完	51.7	16.1	4.4	2.96	P ₁	7.9×2.0	1	H	46		15	46 15	F	黒曜石
16	16	石核		48.4	32.8	22.5	35.84										黒曜石
17	29	剥片		4.2	6.2	1.4	0.03										黒曜石

第5表 第5地点下層石器属性表

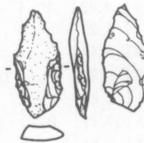
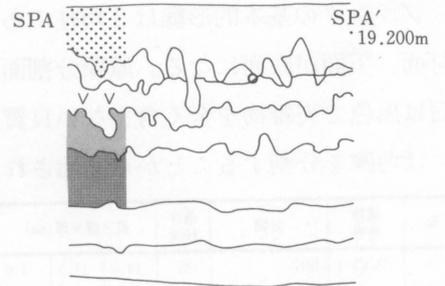
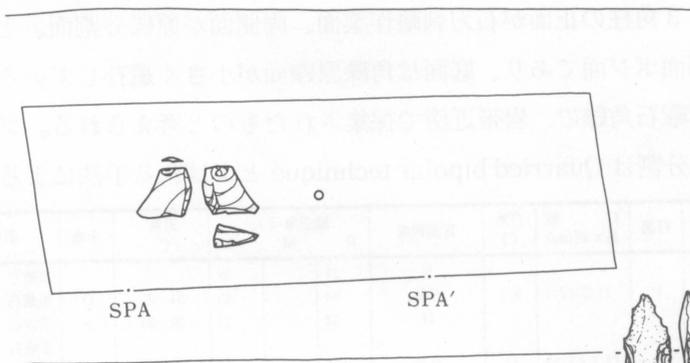
旧石器第1地点



旧石器第2地点

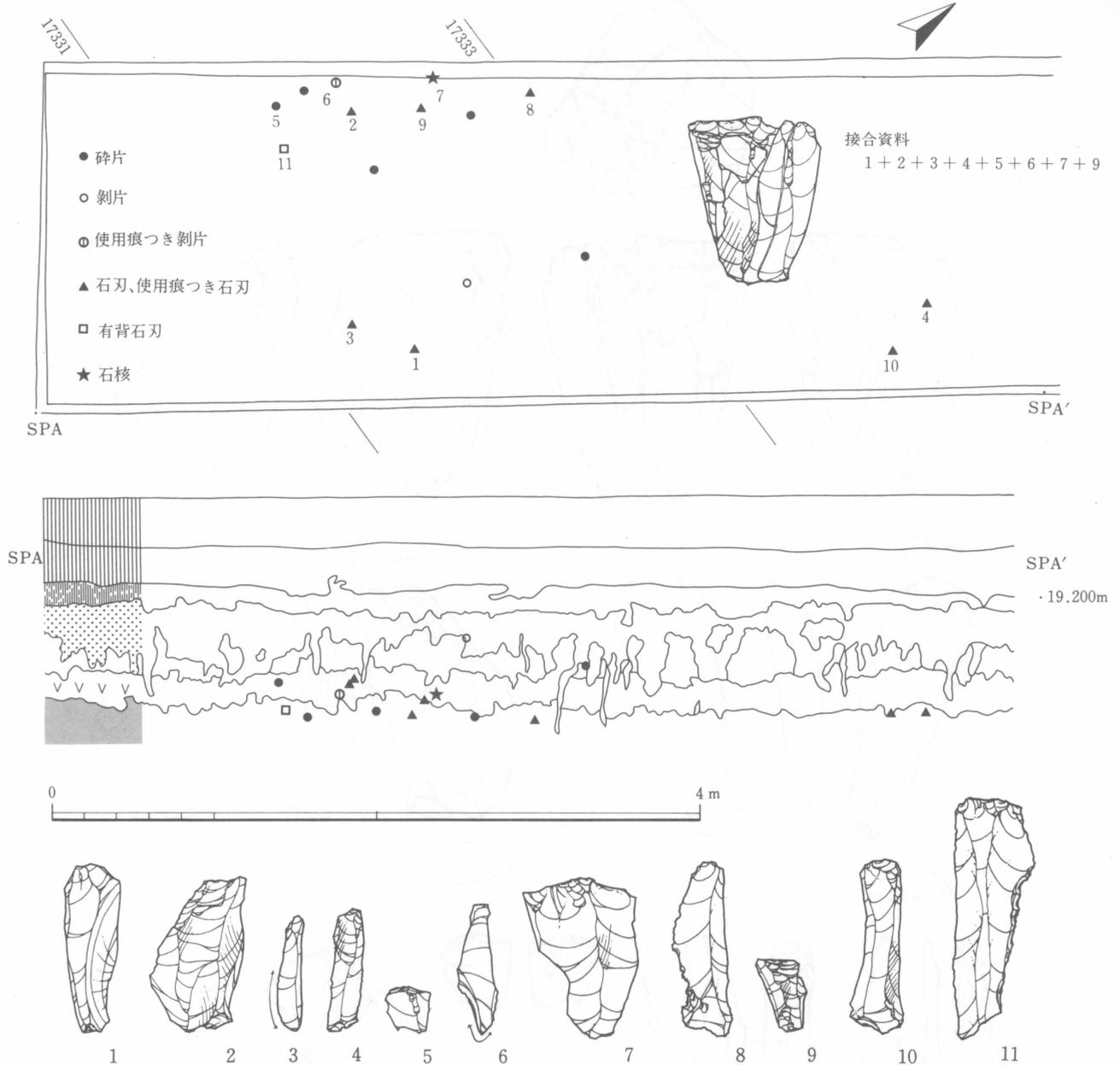


旧石器第3地点



- 碎片
- 剥片

第8図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図(第1・2・3地点)

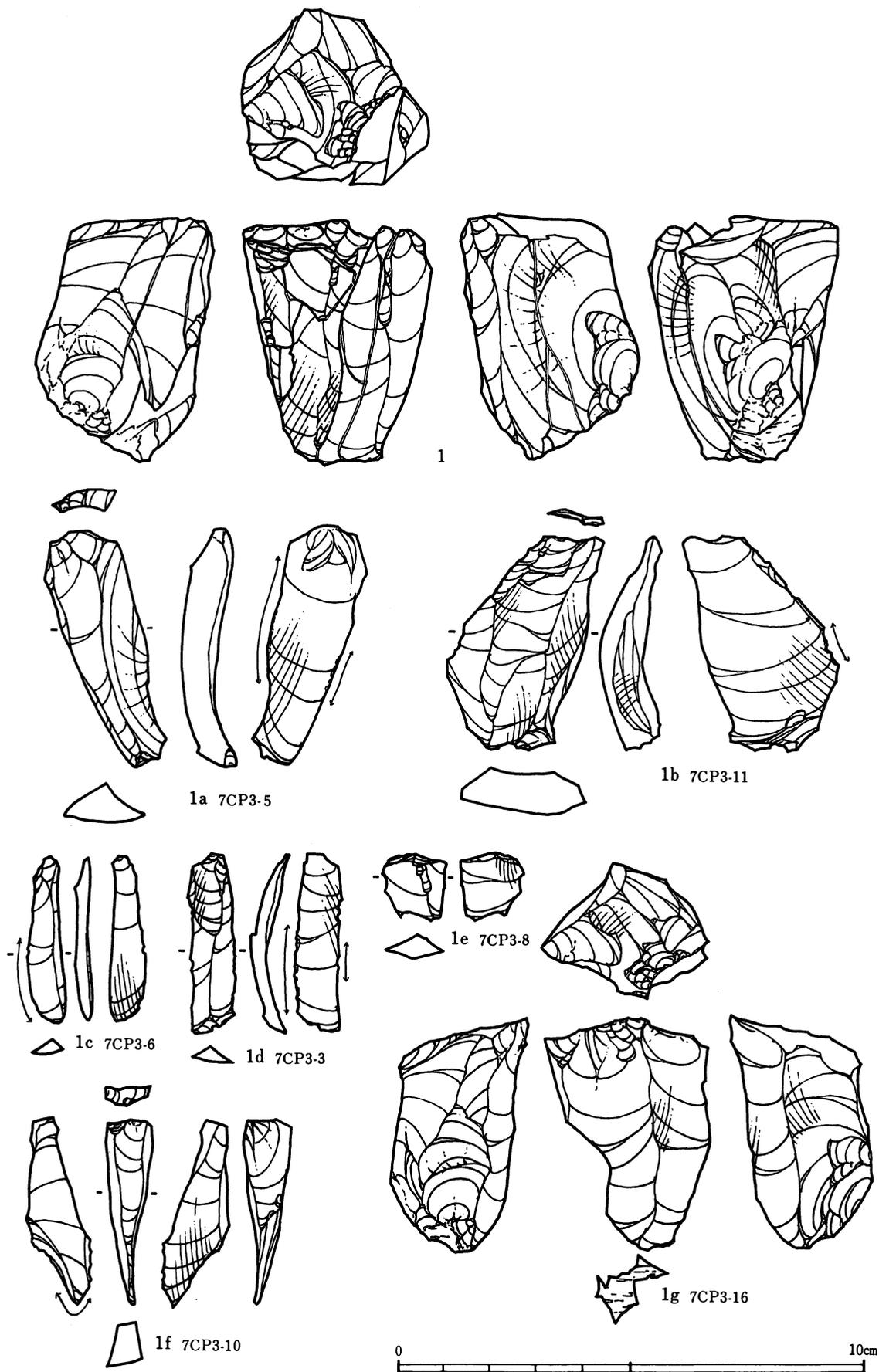


第9図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図(第5地点下層)

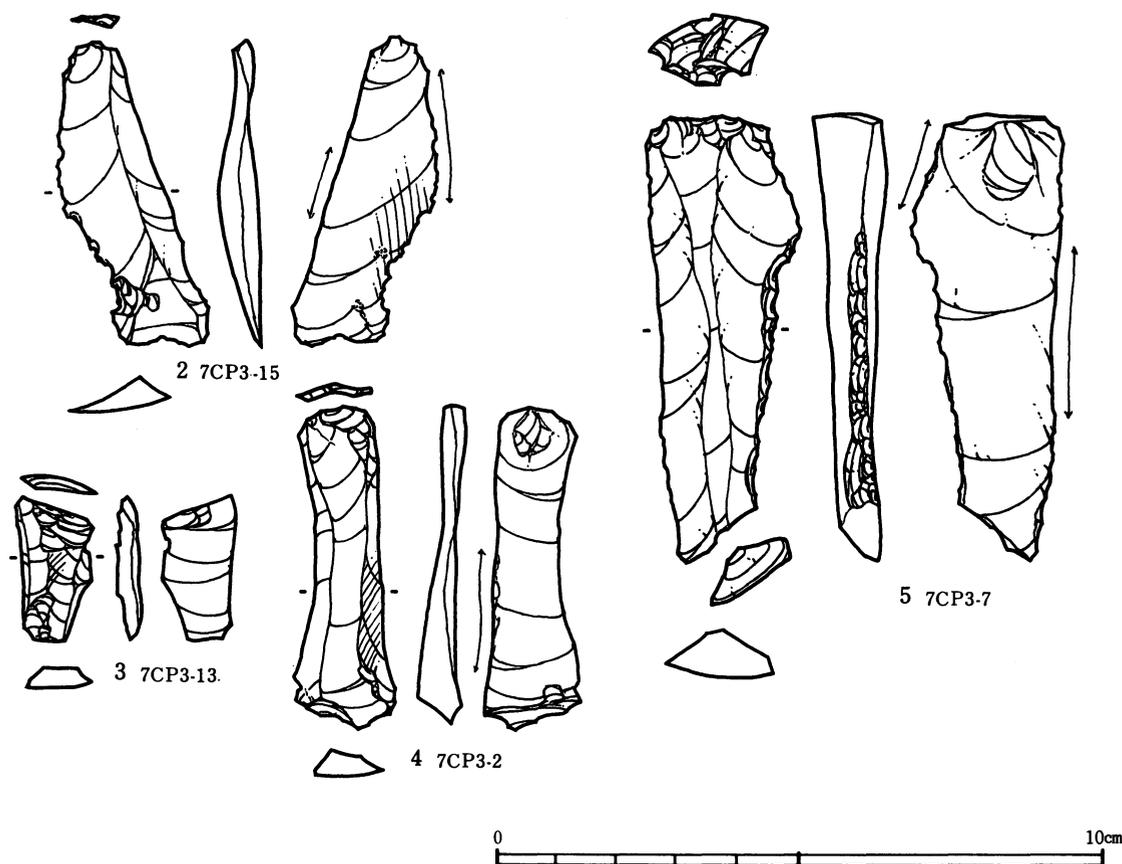
と想定される。分割後、分割面の凹凸を除去するために加えられた粗い調整剥離が認められる。

打面には修整が観察されるが、打面修整は大きく2段階に分かれる。第1段階は角礫原礫面の除去に始まり、おおむね平坦な打面の形成に終わる。次の第2段階は石刃生産の過程で打点周辺の凹凸を除去するための精細なもので、石刃生産の進行に従って適宜実施されている。石刃の剥離は両側面に規制されたポジ面を作業面としてすすめられる。ポジ面高は50mm程度であり、緩く彎曲した小形の石刃が連続的に剥取されている。

この過程で生産された石刃は5点遺存しているが、幅の広いもの(第10図1a、1b)と幅の狭いもの(同1c、1d、第11図3)の両者が同時に生産されることがわかる。これらの石刃のうち4点には使用



第10図 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図(第5地点下層-1)



第11図 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図(第5地点下層-2)

痕と推定される連続微細剝離痕列があり、残りの1点も意図的に折断されている(第11図3)。剝片と分類した1例(第10図1b)もあるいは幅広石刃の破片であるかもしれない。これにも使用痕がつく。

第11図にはこれ以外の主要石器を示した。2は半透明の灰色系黒曜石製石刃で、両側縁に使用痕が観察される。4は透明な地に黒色の縞が入る黒曜石製石刃で、片側縁に顕著な使用痕を留めている。下端は折れている。なお、2、4の石材は接合資料の黒曜石とは別母岩であり、単品。5は中型石刃製の有背刃器である。石質はチョコレート頁岩と呼んでいる日本海沿岸産の珪質頁岩である。黒曜石の石刃よりも大型の調整打面付中型石刃の片側縁に刃つぶし状の調整剝離痕が観察される。また、対向する側縁部の中央には使用痕が認められる。尾端は折断される。

以上により、第5地点下層石器群は、1個体の黒曜石を対象とする石核消費に関わる資料体と、1母岩1個体からなる搬入石刃の資料体という2群から構成されていることがわかる。調査範囲が余りにも狭隘であり、資料的制約が大きい。この地点に搬入された石器にはコア・ブランクと石刃の両者があり、コア・ブランクは消費され、生産された石刃が搬入石刃とともに使用に供されたプロセスが想定されることになる。

6 第5地点上層(第12・13図)

本地点は第5地点下層北東側に隣接しているが、遺物産出層準から明瞭に分離された。遺物の分布は東西約8mに及び、分布状況から2か所の集中地点に分かれる可能性が高い。すなわち第13図からうかがわれるように、南側のやや分布の疎な集中と、北側の密な集中が視覚的に分離されるが、調査区の制約があ

るため十分に分布状況を把握することができなかった。調査区の外側にさらに遺物の散布がひろがる可能性はきわめて高く、本調査の範囲内でその分布を論じることはできない。このためここでは一括して第5地点上層石器群としておきたい。遺物産出層準はソフト・ローム層下部からハード・ローム層上位であり、下層石器群とはVI層を介して明確に分離される。

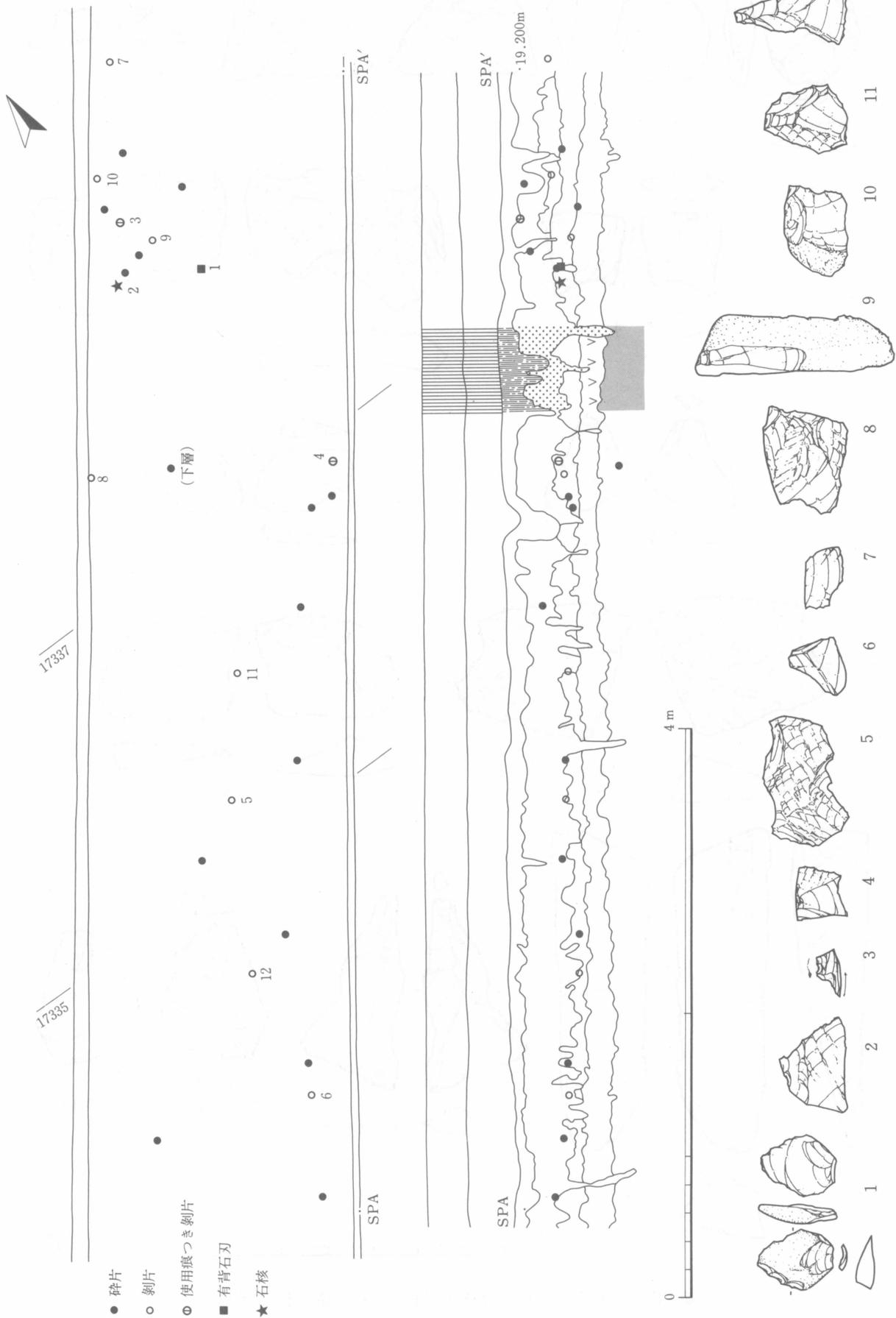
遺物総数は25点で、内訳は有背刃器1点、使用痕つき剥片2点、剥片8点、碎片12点、石核1点、礫片1点である。これを石材別に分類しなおすと、粘板岩12点、安山岩A 6点、安山岩B 2点、チャート2点、頁岩1点、玉髓1点となる。礫片は泥岩である。

はじめに石材について検討しておく。礫片は措くとして、石器石材には6種ある。このうち最も資料数が多いのは粘板岩であるが、この石材は黒色で暗灰色～褐色の風化面をもつ。安山岩A、Bはいずれも黒色緻密質安山岩であるが、Aは灰黒色の風化面もつもの、Bは褐色系の風化面をもつものをいう。Aについては、いわゆる黒色頁岩との判別が難しい場合がある。チャートとしたものは珪質頁岩であるかもしれない。頁岩は褐色系のもの、玉髓は白色系のもので、いわゆるメノウである。これらの石材産地を同定することは不可能であるが、関東平野及びその周辺で入手することができるものばかりである。千葉県内においてすら、その全てを採集することができる。いずれにせよ、関東地方で採集不可能な石材ばかりをそろえる下層石器群とその著しいちがいに注意したい。

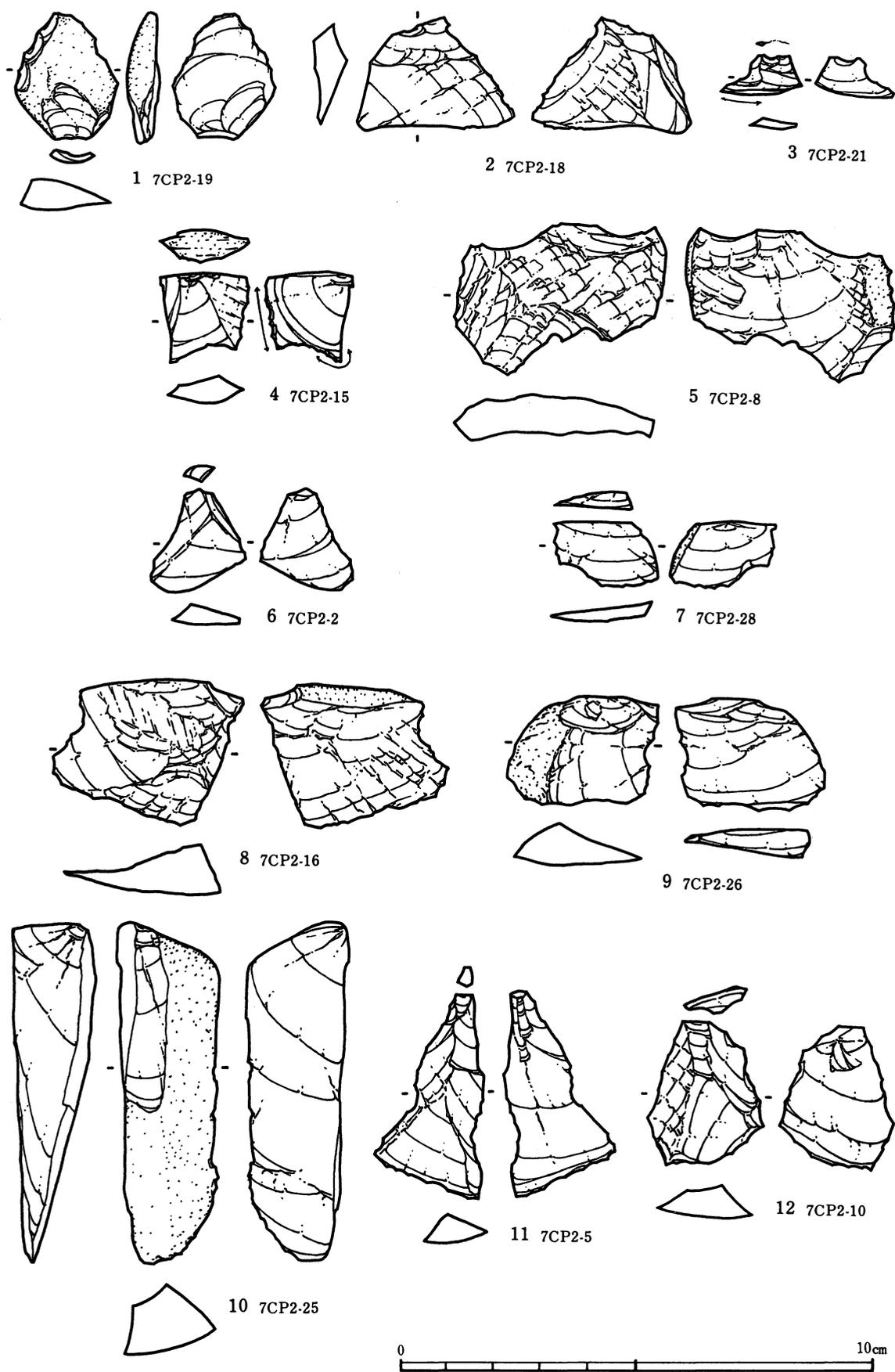
石器群の基本的な特徴はブロック状石核の消費を基盤とすることである。ブロック状石核には薄型のもの(2)しか回収されていないが、厚型のものもあつたはずである。この種の剥片生産においては、石核の側面規制から自由であることによって、長幅指数1の前後に大半の資料が分布することになるが、一般にその長幅比の標準偏差は大きい。また、未加工の剥片の多くが刃器として使われることが多いが、ここで重要なのは、割り出された一群の剥片から一定の選択基準に従ったブランクの抜き取りが行なわれる点である。これをカリングと呼ぶが、カリングはブロック状石核の消費に埋め込まれていることに留意しなければならない。

No.	遺物番号	分類	遺存状況	長×幅×厚(mm)				重量(g)	打面	打長×幅(mm)	打角(°)	背面構成	縁辺角(°)			刃角(°)	末端	石材
				長	幅	厚	重量						R	M	L			
1	7CP2-1	礫片	折	17.7	16.4	6.1	1.99	F		12.4	H	-		38	H	泥岩 安山岩A チャート		
2	2	剥片		21.3	18.7	4.9	1.36											
3	3	碎片		6.6	6.2	2.0	0.06											
4	4	碎片	完	10.4	13.9	3.1	0.45	F	4.8×3.8	10.2	H	38	32	F	粘板岩 粘板岩 粘板岩			
5	5	剥片		42.2	24.0	5.4	3.28											
6	6	碎片		3.2	4.6	0.8	0.03											
7	7	碎片	折	12.5	12.3	3.6	0.60	F	1	1	CHLB	36	F	粘板岩 安山岩A 粘板岩				
8	8	剥片		31.0	47.4	9.1	14.32											
9	9	碎片		11.5	11.1	5.1	0.58											
10	10	剥片	完	29.2	23.4	7.2	4.76	F	11.8×4.7	1.17	RLH	51	41	F	粘板岩 安山岩A			
11	11	(欠)																
12	12	碎片		5.7	8.5	2.1	0.17											
13	13	碎片	折	7.5	12.7	1.3	0.16	C1	1	89	FH	38	43	-	38 40	F	粘板岩 メノウ 粘板岩	
14	14	碎片		10.4	18.6	5.1	0.70											
15	15	使用痕つき剥片		18.6	18.6	7.8	2.33											
16	16	剥片	完	26.2	39.0	9.9	8.55	CF	32.8×10.8	11.0	H	72	17	H	粘板岩			
17	17	(欠)																
18	18	石核		30.2	29.3	6.2	4.11											
19	19	有背刃器	完	26.3	21.1	6.4	3.31	F	9.2×2.3	10.5	CH	29	F	粘板岩 安山岩A 粘板岩				
20	20	碎片		11.8	8.5	4.5	0.44											
21	21	使用痕つき剥片		8.2	16.7	1.7	0.20											
22	22	碎片	完	6.6	10.6	1.5	0.10	F	6.9×0.8		HV	68	56	27	56	F	粘板岩 チャート 粘板岩	
23	23	碎片		12.1	5.1	3.2	0.16											
24	24	碎片		8.7	7.3	3.2	0.20											
25	25	剥片	折	66.9	21.0	13.6	21.95	C	16.2×15.0		CH	57	-	F	安山岩B			
26	26	剥片		23.8	33.5	8.4	6.37											
27	27	剥片		5.3	8.4	1.2	0.05											
28	28	剥片	完	13.2	21.6	3.8	1.15	F	16.2×3.4	98	CL	13	19	58	F	安山岩B 安山岩A 安山岩B 安山岩A		

第6表 第5地点上層石器属性表

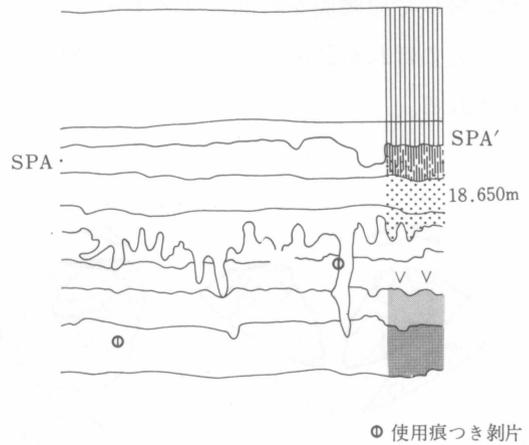
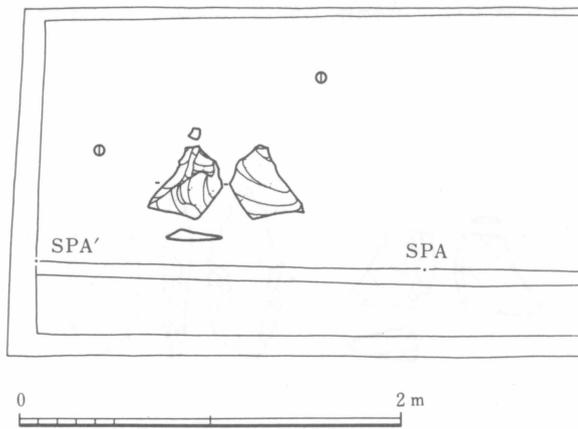


第12図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図(第5地点上層)



第13图 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図(第5地点上層)

旧石器第6地点



第14図 道堀遺跡旧石器時代遺物分布図(第6地点)

例えば3をみてみよう。これは長さ8.2mm、幅16.7mmという非常に小型の矩形剥片であるが、底辺の一部には使用痕と考えられる微小連続剝離痕を見出すことができる。この観察結果に誤りが無いとすれば、本資料は刃器用ブランクとしてカリングされ、実際にも使用されたことになる。そのサイズの大きさからみて、本資料のような小型刃器は手持ちで使われたのではなく、植刃器に嵌挿されていた可能性が高いであろう。もちろん本例を特殊例として看過することもできるかもしれないが、詳細は使用痕観察の実施された長崎県百花台遺跡の小型刃器のあり方は、このような判断の当否に大きな影響力をもつことになろう。

以上によって、本石器群は関東地方において入手の容易な数種の石材を素材とし、ブロック状石核の消費を基盤とするものであることが明らかとなった。同趣の石器群は本文化層とだいたい同じ層準から少なからず検出されているが、その時代は最終氷期最寒冷期に前後する頃であったと考えられる。

7 第6地点 (第14・15図)

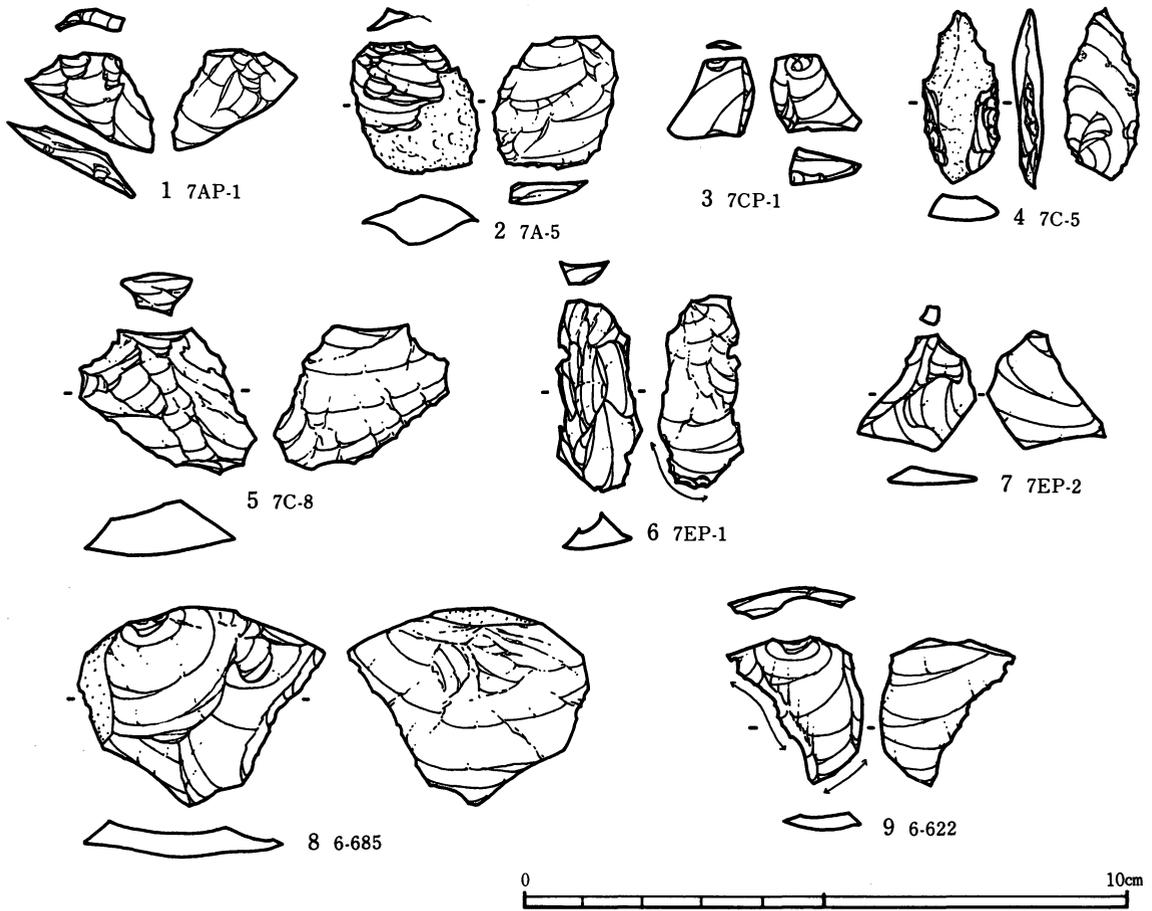
M区の追加調査区にある。土層確認のためやや深くまで掘り下げたところ使用痕つき剥片がVI層上部から出土した。拡張調査を実施したがIX層から同じく使用痕つき剥片(第16図7)が1点出土したに留まった。しかし調査区の周辺にさらに分布が広がる可能性がある。

No.	遺物番号	分類	遺存状況	長×幅×厚(mm)				重量(g)	打面	打長×幅(mm)	打角(°)	背面構成	縁辺角(°)			刃角(°)	末端	石材
				長	幅	厚	R						M	L				
1	7FP-1	使用痕つき剥片	完	29.6	13.6	9.3	0.89	F	6.3×3.1		LV	69		66	34	F	珪質頁岩	
2	2	使用痕つき剥片	完	18.7	17.0	2.2	0.56	F	4.6×3.3	118	H	14		31	33	H	王髓	

第7表 第6地点石器属性表

8 その他の遺物 (第15図)

縄文時代住居跡1から明らかに旧石器時代の所産と考えられる資料が2点採集されている。8は凝灰岩製の剥片で原礫面を打面とするもの。9はチャートに近い硬質の頁岩製の剥片である。縁辺部2か所に細かな刃こぼれが認められる。以上の遺物の所在により、住居跡近傍に遺物集中地点が存在する可能性が想定される。



第15図 道堀遺跡旧石器時代遺物実測図(第1・2・3・5・6地点)

第2節 縄文時代

1 住居跡1 (第16図～21図)

C区のほぼ中央部分に位置する。住居跡周辺の畑地には阿玉台式土器が多く散布し、また調査区内にも比較的多くの同式土器破片が認められた。住居跡の検出された地点は台地縁辺部に近い平坦面上であり、手賀沼に直接注ぐ小支谷谷頭部を東側至近距離にひかえている。

(1) 遺構の状況 路盤撤去後にII層を精査した段階で、調査区を南北に横断するような幅約4mほどの溝状の落ち込みが検出され、これを掘り下げたところ、検出面から-0.6mほどで底面に達した。掘り下げられた遺構は切り立った壁面と平坦な床面、中軸線上に並ぶ3か所のピット(P₁～P₃)から構成される遺構で、覆土内にはほぼ単純に阿玉台I b式の土器片、石器が多量に包含されていた。当該期の遺構の類例から長円形タイプの住居跡であると判断されるが、調査区の制約のため全体のプランの把握はできなかった。

床面はおおむね平坦でローム層(VII層相当)を削り込み、平らに整形、踏み込みが実施されている。掘込面上に40～50mmくらいの厚さをしたロームが水平にかつ密に堆積しており、この層上でP₁、P₃が確認されたにもかかわらず、P₂は全く捕捉できなかったことから、最終床面はこのロームの薄層を貼付して形成された可能性が高い。P₁は径0.12m、深さ0.80mで西側に抜き取り時の掘り方が認められる。P₂は前述のとおり貼床で埋められていたが、径0.10m、深さ0.26mある。P₃は径0.24m×0.20mの長円形で深さは0.80mある。このピットも両側に抜き取り用の掘り方がある。以上より、まずP₂が掘られ、次いで改修作業にともなって床面の整備とともにP₁が掘り直された経過が推定される。P₃も改修に伴って新たに掘削されたものと考えられる。壁面は僅かに傾斜しているが、壁面に沿って壁面崩壊に由来するローム層が三角堆積しており、もともとは垂直に近い形態をしていたものと推定される。

覆土は10層に細分されるが、基本的には3ユニットに分けることができる。

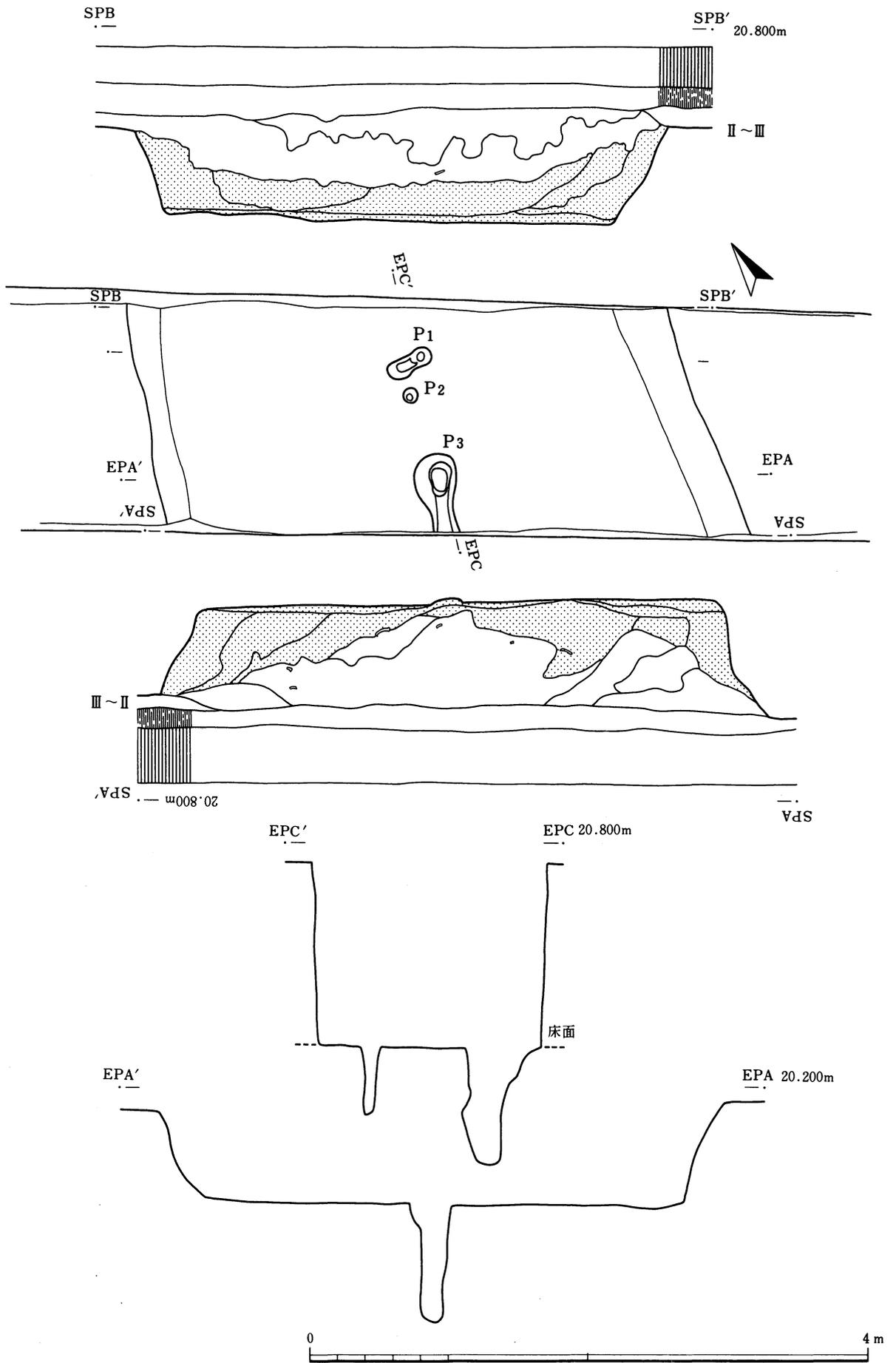
ユニット1 覆土の下半を占める(第16図土層断面図の網の部分)。ソフト・ローム層を基本に、これに暗褐色土やハード・ロームの細かいブロックなどが混入している。人為的な埋め戻しの可能性も高いが、その一部が竪穴周囲の凸堤の崩落土であることも考慮すべきであろう。遺物はほとんど含まれていないが、ややまとまる土器片が一括廃棄されていた(第18図1)。

ユニット2 覆土の上半を占める。黒褐色土が基本となるが、これに諸種の褐色土、ロームなどが混入する。また骨片が粉末状に相当量混入しており、多量の遺物(第17図)とともに有機質の残渣が継起的に廃棄され続けた結果形成されたものと推定される。

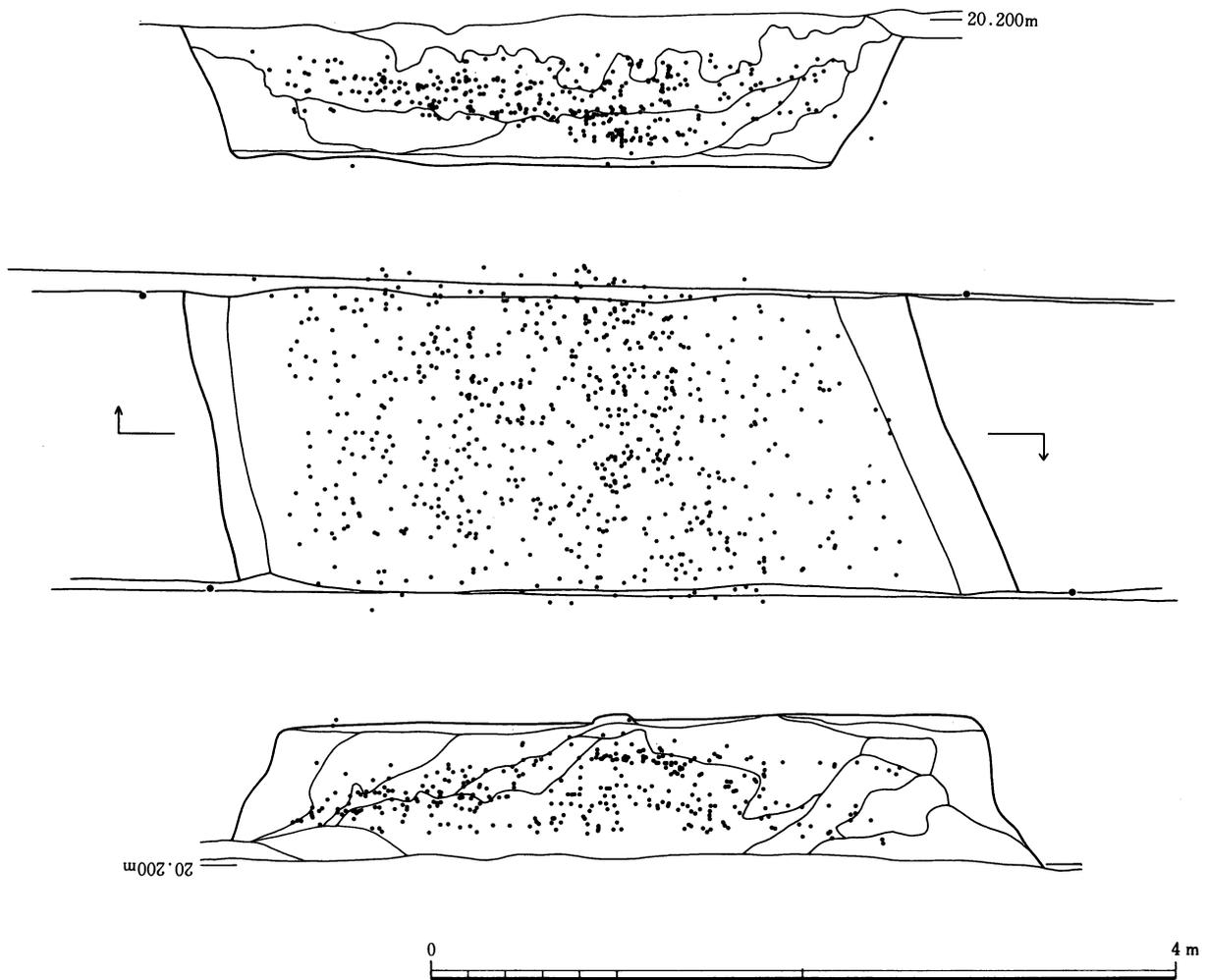
ユニット3 第17図南壁土層断面図に明示されているが、ユニット2を掘り込む土坑の覆土である。ユニット2がほぼ住居の凹みを埋めた後に掘り込まれたものと推定されるが、覆土掘り下げ時には識別できなかった。住居跡の東壁に沿って径1.5～1.6mの穴が掘られたのであろう。その掘削時期は必ずしも明瞭ではないが、出土遺物からみてユニット2直後であろう。

(2) 出土遺物 本住居跡から出土した遺物の総数は1,137点である。その内訳は土器片966点、石器159点、土製品12点である。その大半は覆土ユニット2に包含されていたが、ユニット1、3からも少量の出土をみた(第18図)。床面上からは遺物はほとんど検出されなかったが、コハクの剝片が1点遺存していた。

A 縄文土器 966点の土器片を時期別に分類すると、前期の繊維土器185点、阿玉台式土器757点、後期の磨消縄文土器1点、不明23点となる。ここでは住居跡の帰属時期である阿玉台式を中心に概要を説明する。



第16図 道堀遺跡住居跡1平・断面図



第17図 道堀遺跡住居跡1 遺物出土状況

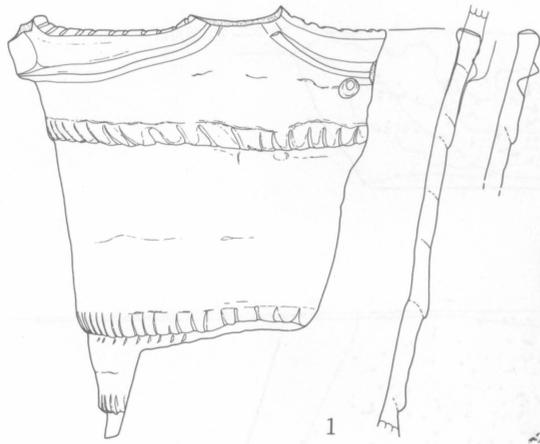
A₁ 覆土ユニット1から1個体分の土器が出土した(第18図1)。把手をもつ深鉢形土器で本住居跡では最も古い土器とみられる。口縁部にそって断面3角形の細目の隆帯が一巡する。また口縁端に刻目が施され、体部には輪積痕が現状で3帯認められる。胎土は精良でやや薄手の土器である。

A₂ 浅鉢形土器とみられるものが1個体ある(第18図2)。扇状把手を結ぶ長円形の枠状区画帯が認められる。区画帯下には半環状の角押文が付されている。2_aは扇状把手部分の拓影である。砂粒を多く含む胎土で、焼成は甘い。覆土ユニット2基底面に集中する。

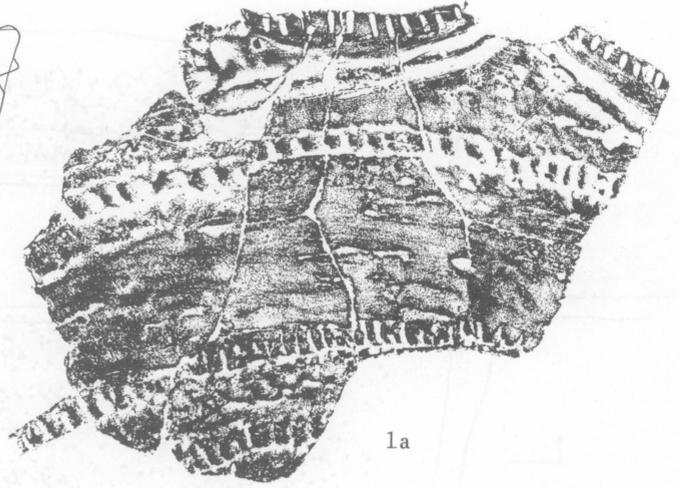
A₃ 深鉢形土器の胴部破片である(第18図3、第19図1~12)。胴部は基本的に、擬輪積痕帯と下垂隆帯及びその附属刻目列によって構成されている。稀に波状沈線(9・10)、横走隆帯(11)が付される。

A₄ 底部が少量ある(第19図13~15)。13~14では下垂隆帯が底部にまで及んでいる。15はおそらく浅鉢形土器の底部とみられるが、明瞭な網代痕を留める。

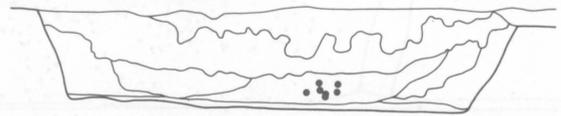
A₅ 深鉢形土器口縁部の諸変異を示す(第20図)。図示にあたっては、小型破片が多く正確な器形を知り得ないことから、断面図はおおむね垂直な形態で図示しておいた(実際はもう少し外に開くものが多い)。これらの資料は覆土ユニット2から一括出土しており、だいたい同時期の諸変異を網羅していると判断される。



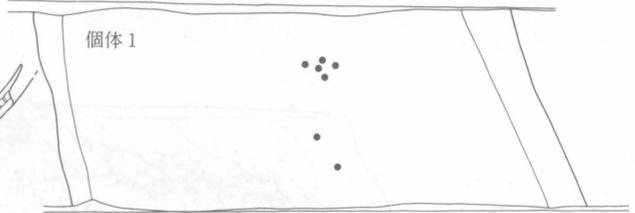
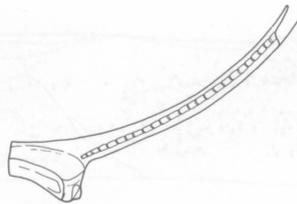
1



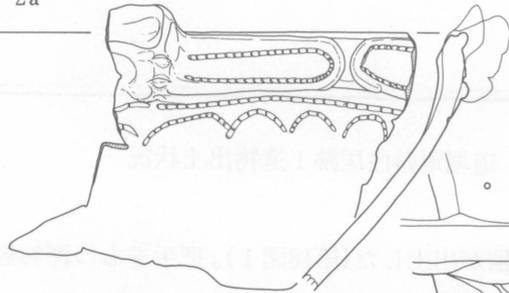
1a



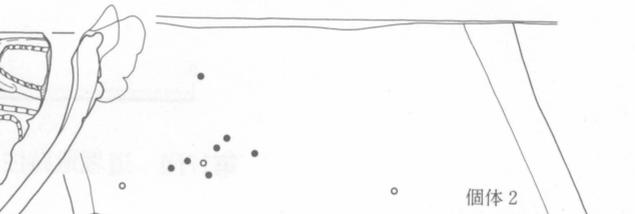
2a



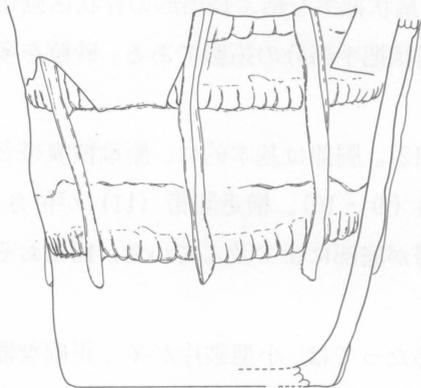
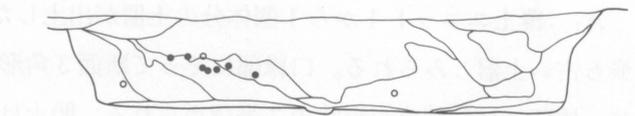
個体1



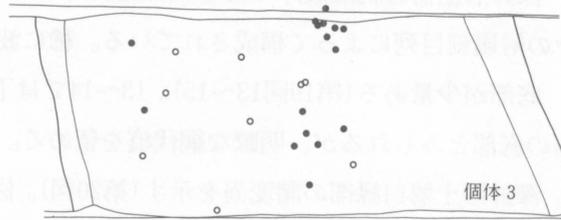
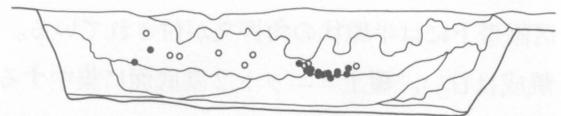
2



個体2



3

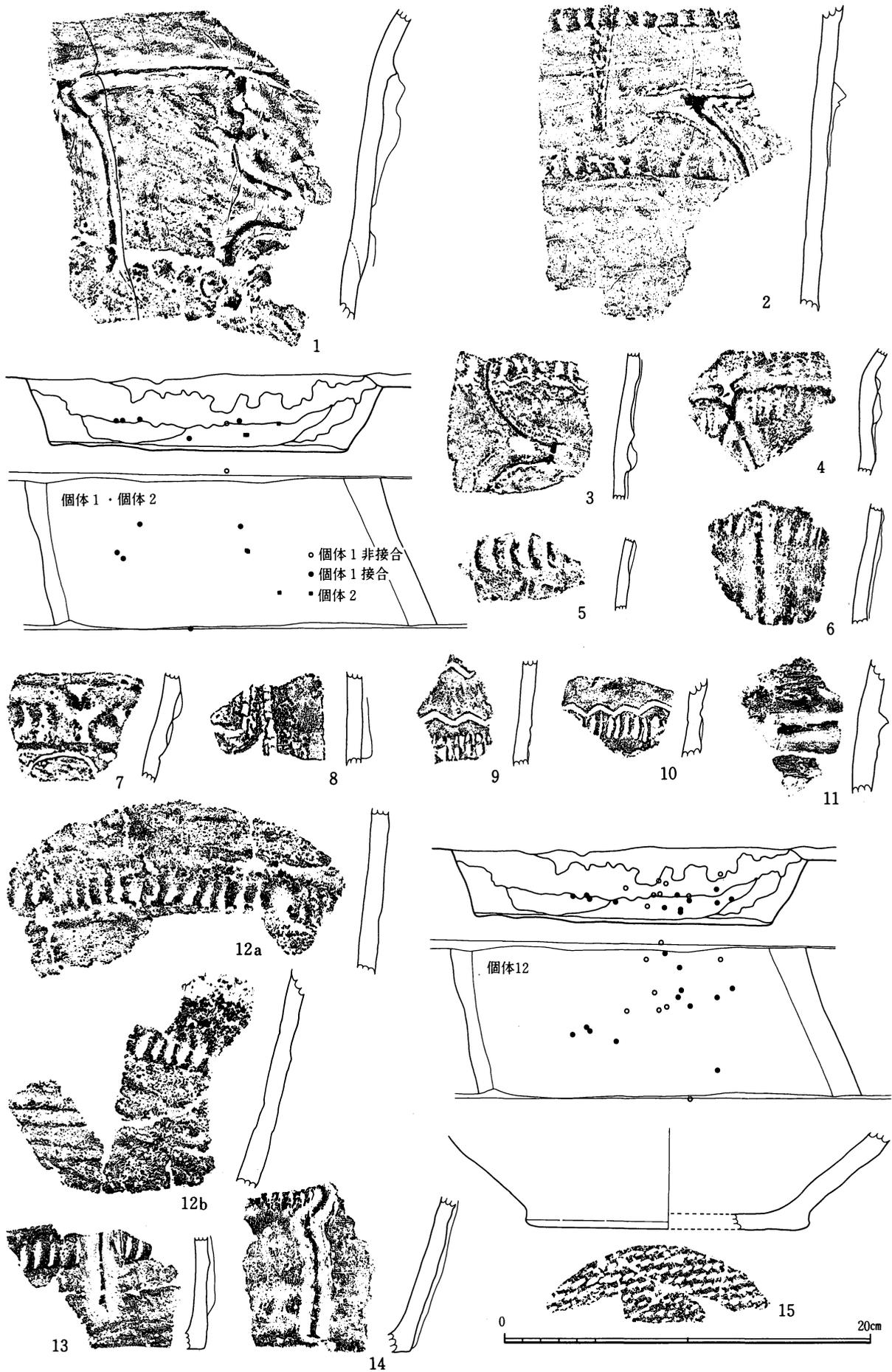


個体3

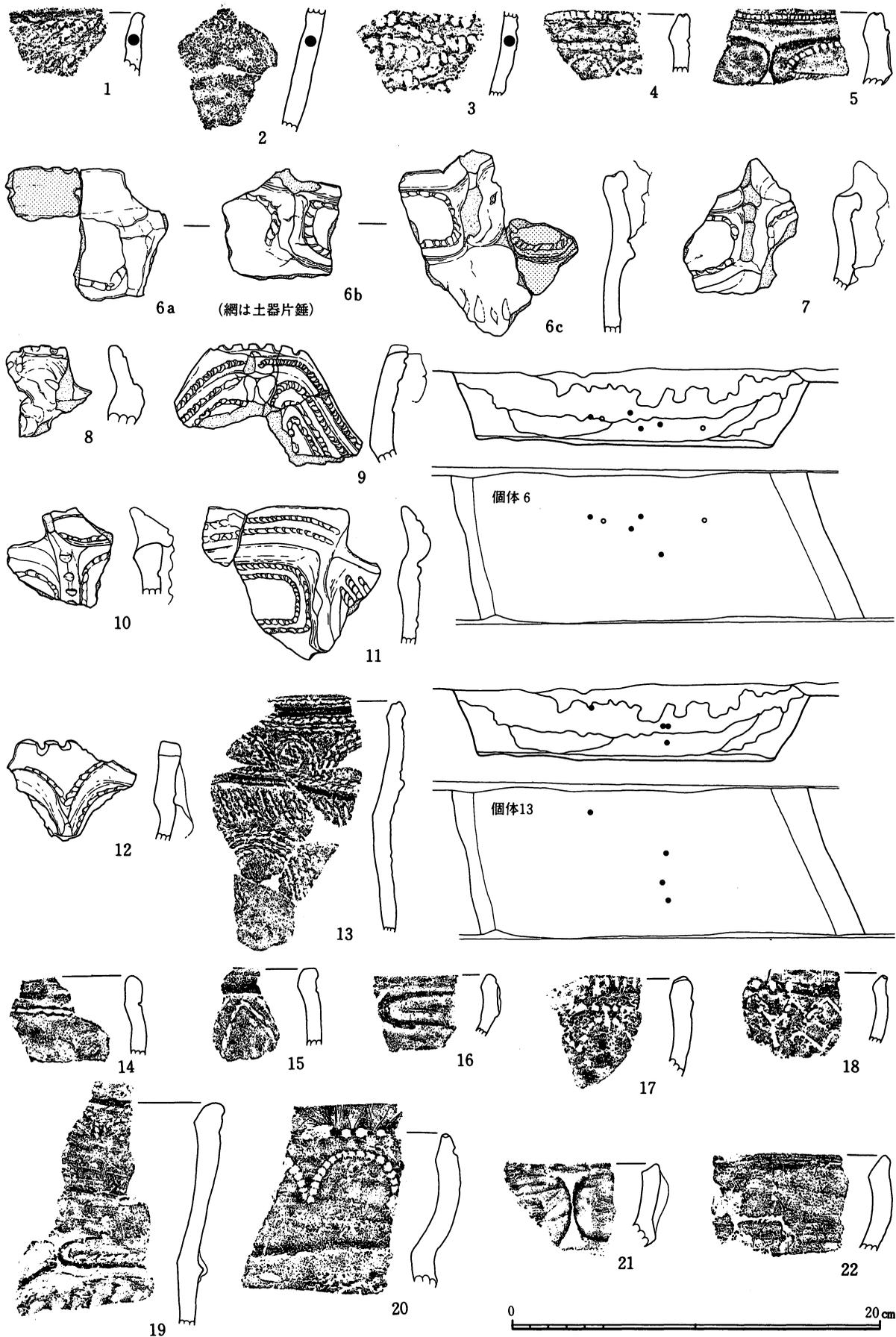


● 接合するもの ○ 接合しない同一個体

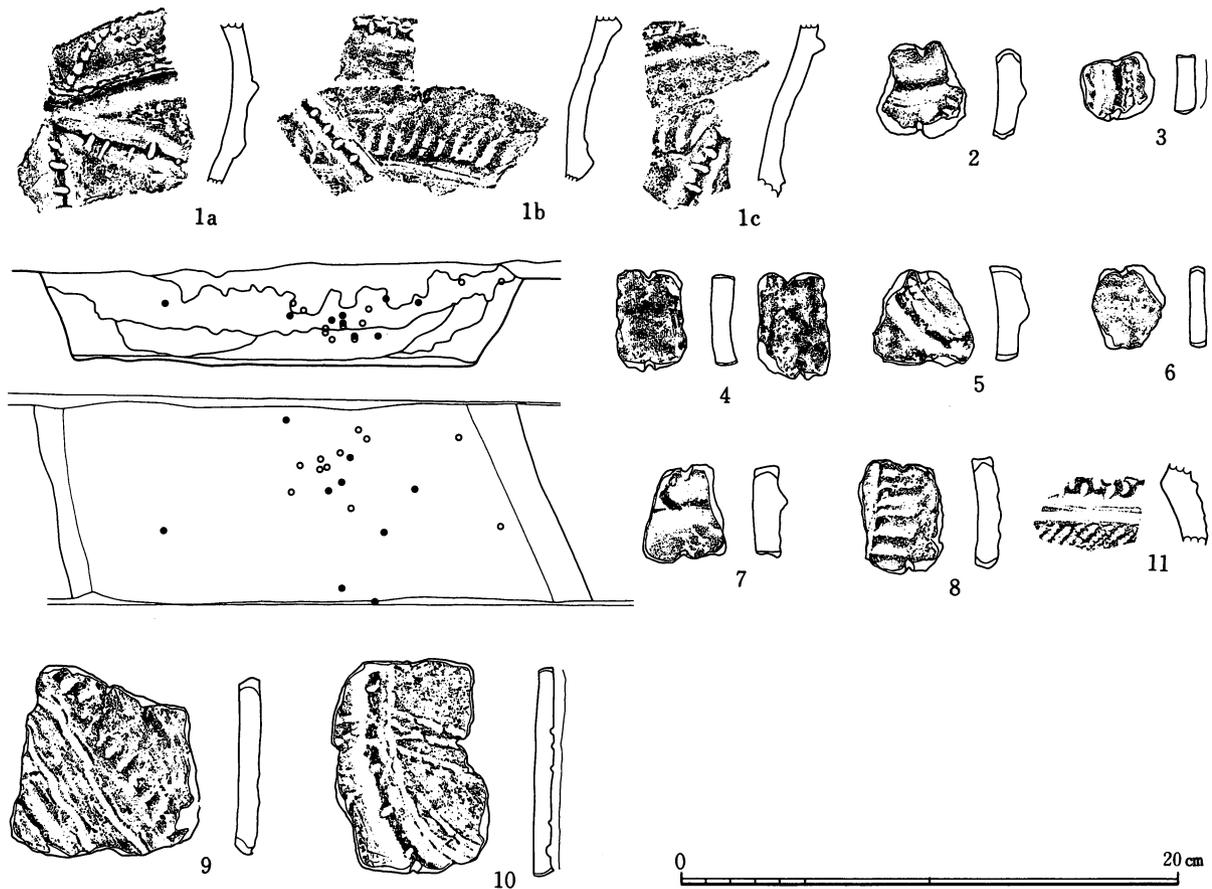
第18図 道堀遺跡住居跡1出土遺物(1)



第19图 道堀遺跡住居跡1出土遺物(2)



第20図 道堀遺跡住居跡1 出土遺物(3) (黒丸は織維土器)



第21図 道堀遺跡住居跡1出土遺物(4)

深鉢形土器の器形の基本は、直線的に立ち上る胴部と内彎気味に外反する口縁部とが頸部で接合されることである。口縁部には平縁と把手をつなぐ波状縁との両者があるが、横位の長円形区画帯をもつものが多い。また、内面口縁部直下には明瞭な稜が付されることが原則である。同様の内稜は頸部にも認められる。

把手は富士山型(9が典型)と扇型(6、11などが典型)の両者が併用されるが、どちらかという扇型把手の量比が高い。長円形区画帯は隆帯に1列の角押文列を添付するもの(5~7)が一般型であり、角押文列を複列化させるもの(11)、省略するもの(16、21)などの変異が存在する。隆帯を抜く場合(4、14)もある。

A₆ 異本として複数列の細目の角押文により半円形区画、区画間蕨手文、半環状連接文を描くものがある(13)。これには頸部に斜行集合角押文が配され、全体としてエレガントな文様が描出されている。この個体は覆土ユニット2の中位にまとまり、A₁~A₆と共存した。

A₇ 口縁部に横位連続区画帯をもたない一群がある。これには19、20などの1条の角押文の下位に半環状連接文を配するもの、雑書文風に波状沈線文が横につながるもの(18)、無文(22)などいく通りかの変異がある。

A₈ 破片であるため全体の文様構成がわからないが、刻目隆帯と角押文、爪形文風の擬輪積痕の3者により幾何学的構図を表現する例が1例ある(第21図1)。I aが胴部上半から頸部の、I b、I cが胴部の

破片と考えられるが、刻目隆帯が垂下し、斜行し、大きい区画帯を構成している。胎土は精良で赤褐色の焼き上りも良い土器であり、図の如く覆土ユニット2の下部に破片が集中している。

A。これらの土器以外に縄文前期の繊維土器（第20図1～3）や後期の磨消縄文土器（第21図11）がある。前期の土器が少なからず覆土ユニット2に混在しているが、住居跡周辺のII層中にも同種の土器片の包含が認められ、住居跡埋没過程で周辺から流入したものであろう。

B土製品 土器片錘が11点ある。土器片錘は小型のもの（第21図2～8）が多いが、やや大型のもの（同9・10）もある。また、土器と接合するものが2例ある（第20図6_a、6_cの網のかけられた部分）。

これら以外に土製品とは言い難いが、いわゆる高師小僧が1点出土している（第23図16）。出土した層位は覆土ユニット2の上部であり、土器片と混在しており、意図的に採取、搬入されたものであることは明らかであろう。両端を欠損するが径12mmぐらいの管状を呈し、中心部分に小孔が貫通している。おそらく装身具用に採取されたものであろう。

C石器 159点あるが、その内訳は黒曜石剥片131点、同使用痕つき剥片7点、同石核1点、石斧4点、石鏃1点、礫片14点、コハク剥片1点となる。これらの大半は覆土ユニット2から土器片とともに廃棄された状態で出土しているが、コハクの剥片は床面上から検出された。

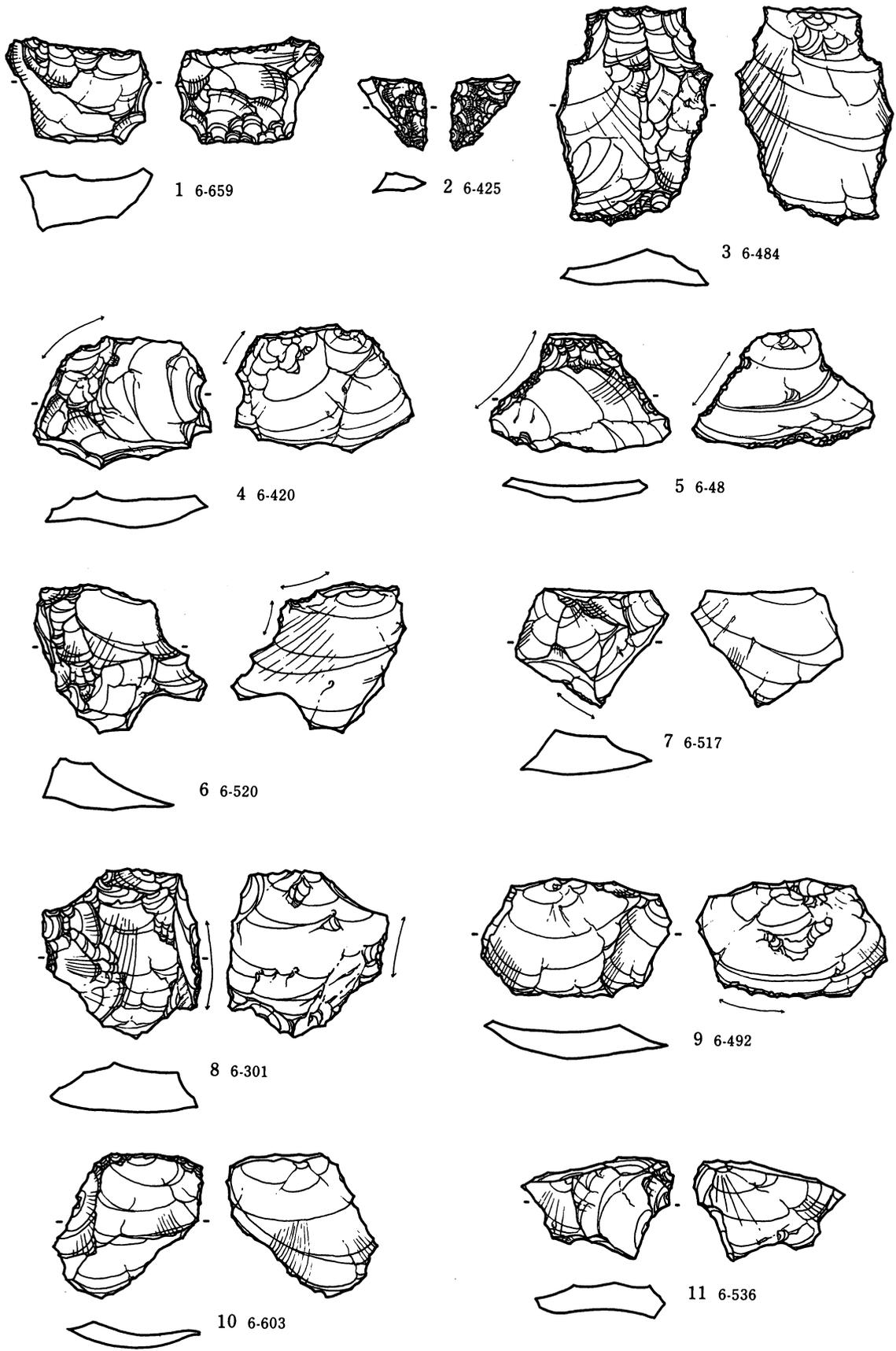
C₁ 黒曜石製の石器である。これには石核、剥片の他に石鏃がある。石核は1点ある（第22図1）。扁平な板状で両設打面をもち、貝殻状の剥片が剥取されている。剥片の大半は長径10mm以下の小型のもので、比較的大き目のものは全例を図示した。剥片の特徴は形状が不ぞろいであり、背面を構成する剥離痕の方向が腹面と斜交あるいは直向することであり、ブロック状石核から剥離されたものと判定される。また、遺存する剥片の背面に原礫面を留めるものがなく、いずれも消費の進行した石核から剥離されたものであることがわかる。

剥片のうち比較的大型のものには使用痕と考えられる連続する微細剥離痕が観察される。（第22図3～9）。これらの微細剥離痕の多くは小鋸歯状をしており、やや硬質の対象物の加工に起因するものとみられる。また、刃部の角度がいずれもかなり切り立っていることもその特徴である。石鏃は脚部付近の破片とみられるものが1点ある（第22図2）。なお、黒曜石の大半は漆黒で光沢に富むものであるが、一部に暗灰色の縞目が入るものもある。

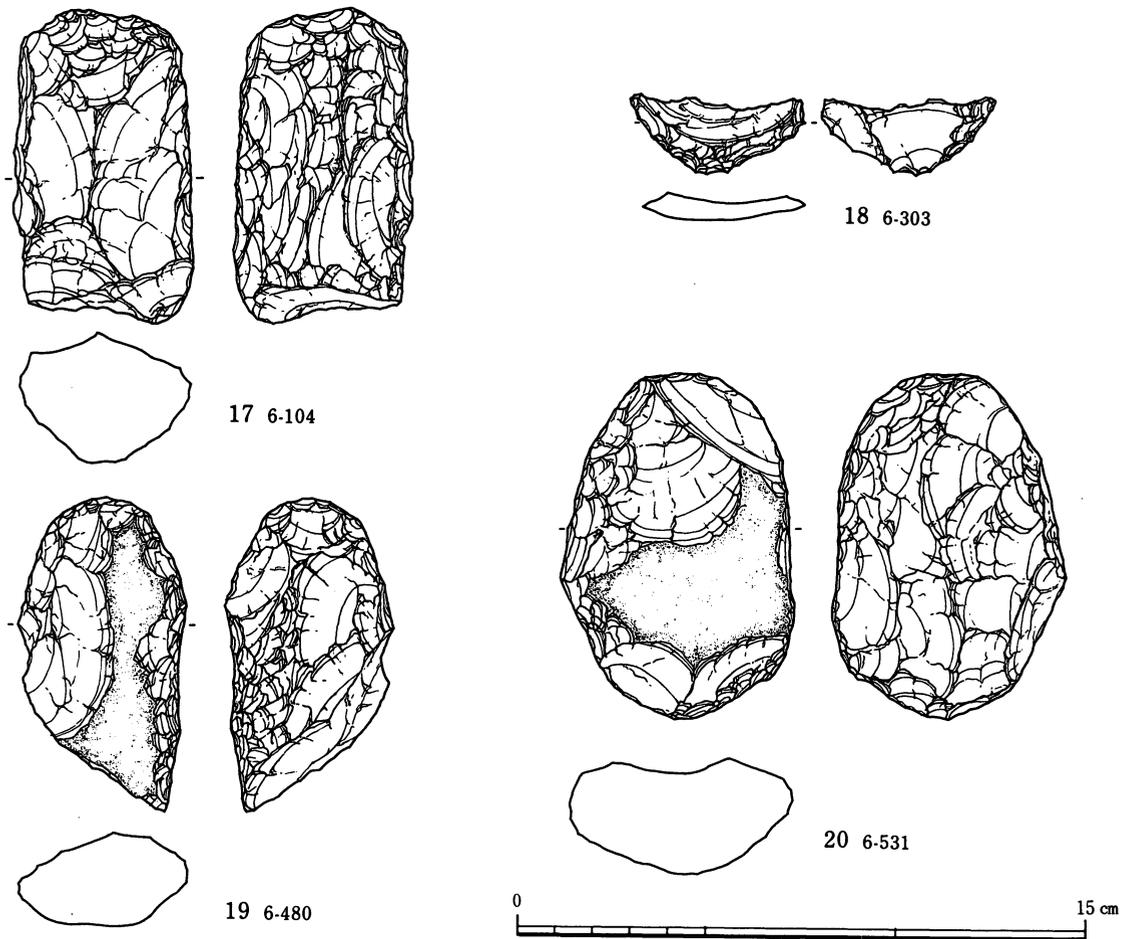
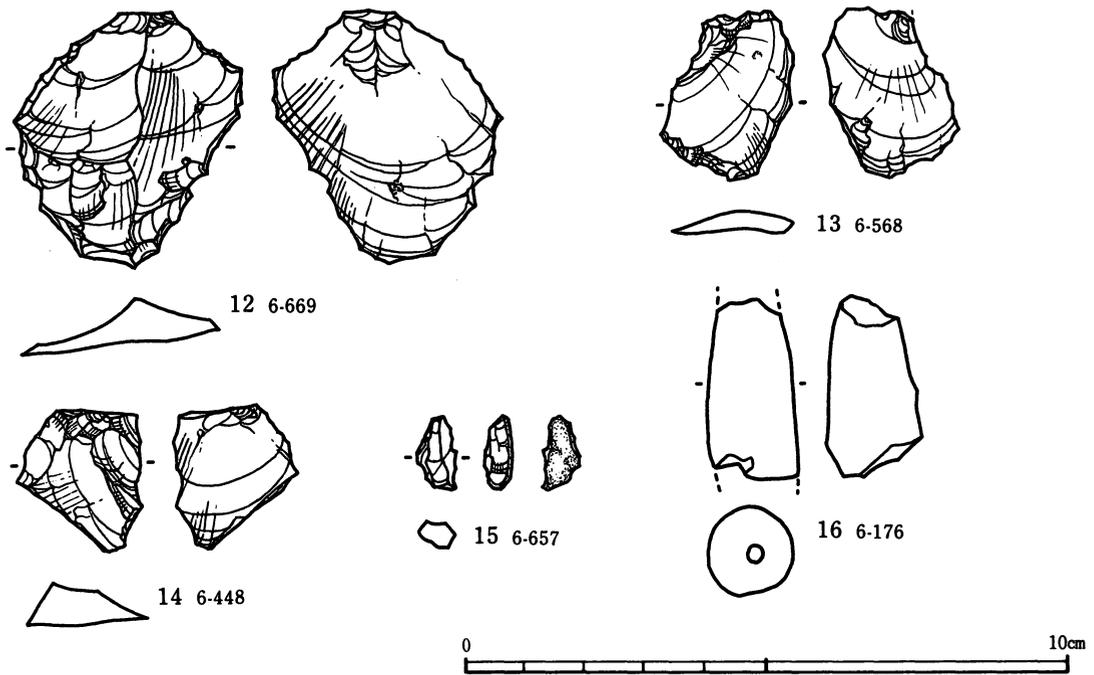
これらの資料から黒曜石の消費過程をある程度推測することができる。まず、礫面付剥片の僅少さ、あるいはその欠如によって、集落内に搬入された原石、あるいはブランクは既に礫面をほとんど留めていなかった可能性が指摘される。縄文時代中期においては、黒曜石は既に「原始貨幣」として主要な交換物資となっていたが、その流通形態は礫面除去という付加価値を荷担したブランクであったとも考えられる。ブランクは各集落で消費されるが、その消費はブロック・コアの消費であり、不定形であるが鋭利な刃部をもつ剥片が量産される。これらの剥片は意図的な選別工程を媒介に第2次的な生産過程に再編入されている。また、その一部は別な石器、例えば石鏃などの素材に転化される。住居跡の凹みには、この過程で生じる多量の碎片類が一括廃棄されているのである。

C₂ 砂岩製の石斧類がある（第23図17～20）。17と19は刃部を欠損するが部厚い短冊形をしている。18は刃部破片。20は完存するが刃部は加撃痕で潰されており、石斧から石槌への機能転化がうかがわれる。

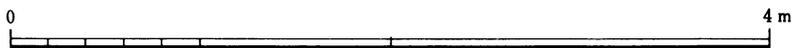
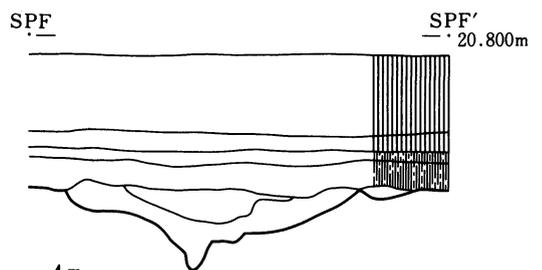
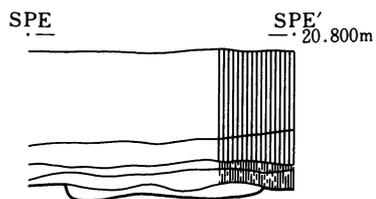
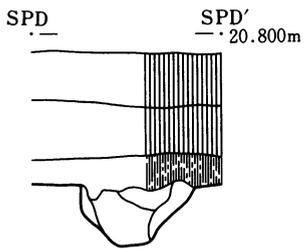
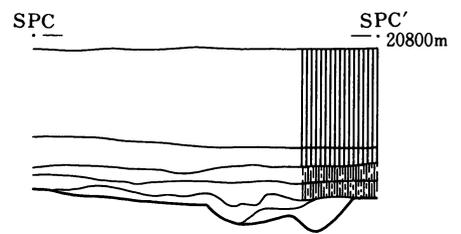
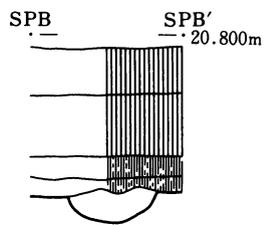
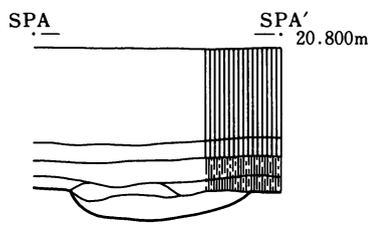
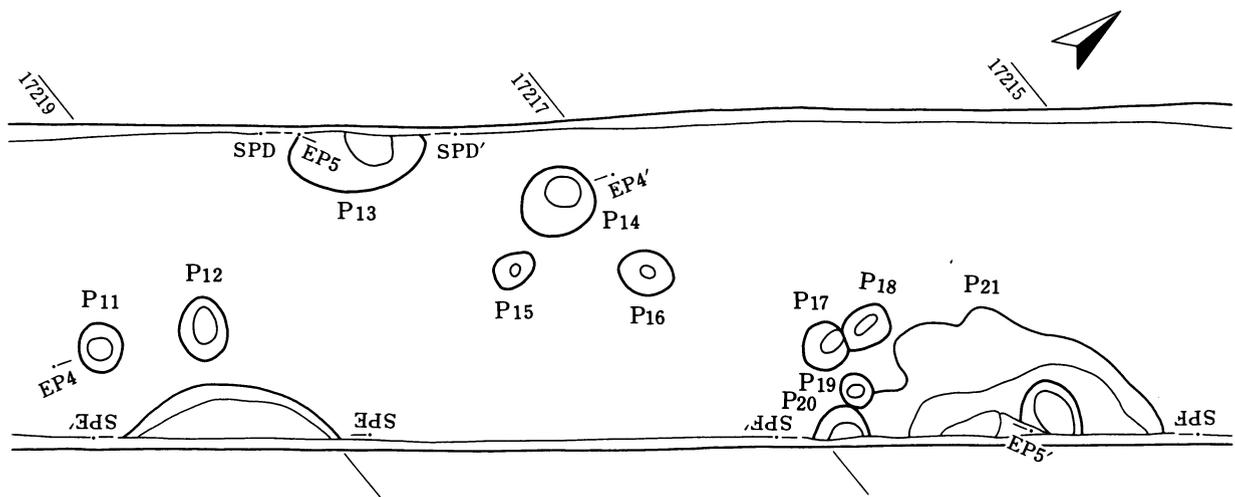
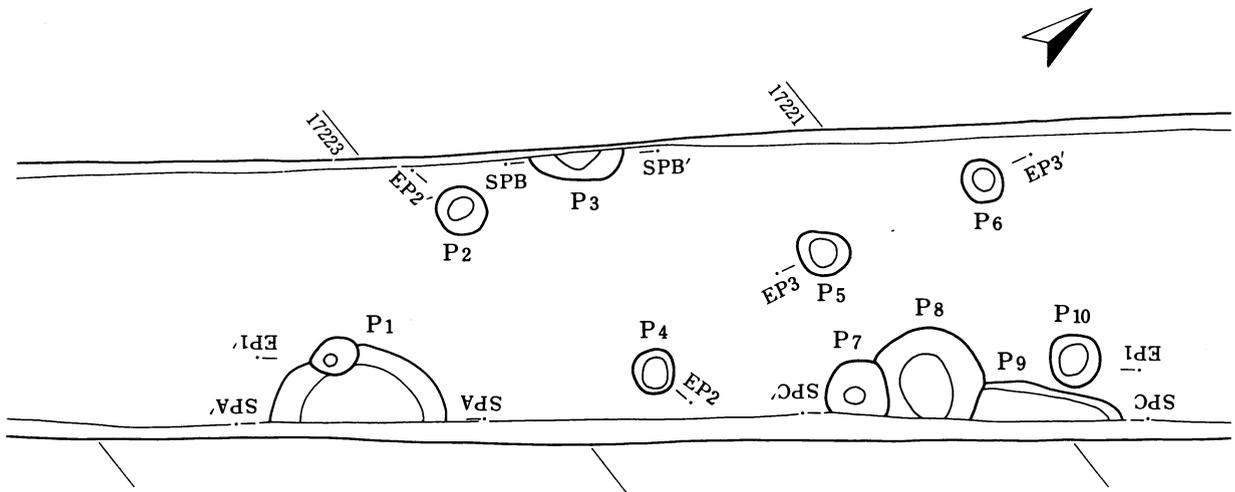
石斧に関連して注意されるのは、石斧の生産に由来する調整剥片類が1点も検出されなかったことである。黒曜石の場合、多量のブランク消費時の作出剥片が遺存していたが、石斧生産に関する砂岩の消費の場



第22图 道堀遺跡住居跡1 出土遺物(5)



第23図 道堀遺跡住居跡1出土遺物(6)



第24図 道堀遺跡ピット群1平・断面図(1)

合、そのような調整剥片は黒曜石以上に生産されるはずであるにもかかわらず、調整剥片が1列も残されていないことは重要である。こうした傾向は本住居跡に限定されるものではなく、本地域の一般的傾向とみられる。その理由は、黒曜石の流通形態が礫面をある程度除去されたコア・ブランクであったのに対して、石斧のような大型で重量のある製品は完成された形態であったことにもとめられる。既に石斧として完成されたものが流通経路にのせられたと考えられる。

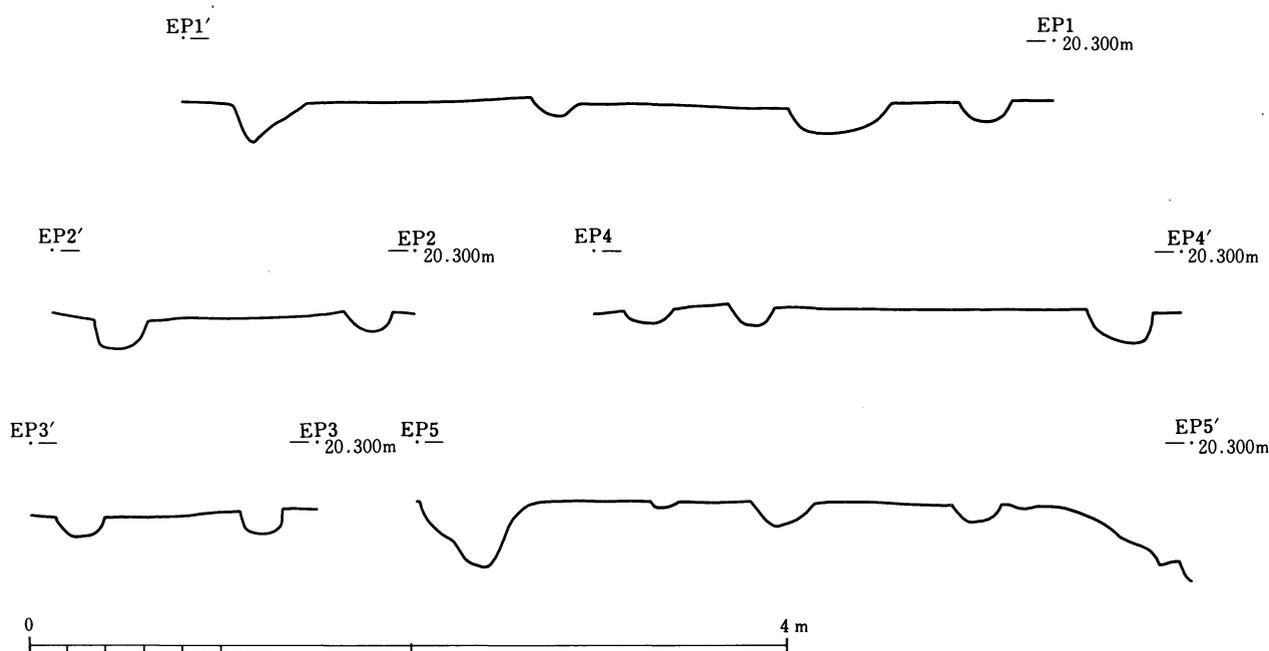
C₃ 1点のみであるがコハクの剥片が得られた(第23図15)。この剥片は住居跡床面から検出された。床面上を精査したが追加資料は得られなかった。剥片は一面にやや風化した感じの面を残し、他面には剝離による不規則な割れ口が認められる。資料が余りにも小さく、また単独出土であるため多くの議論は困難であるが、本住居跡の営まれた時期に、集落内でコハク製品の生産が行われていた可能性が指摘される。

2 ピット群1 (第24・25図)

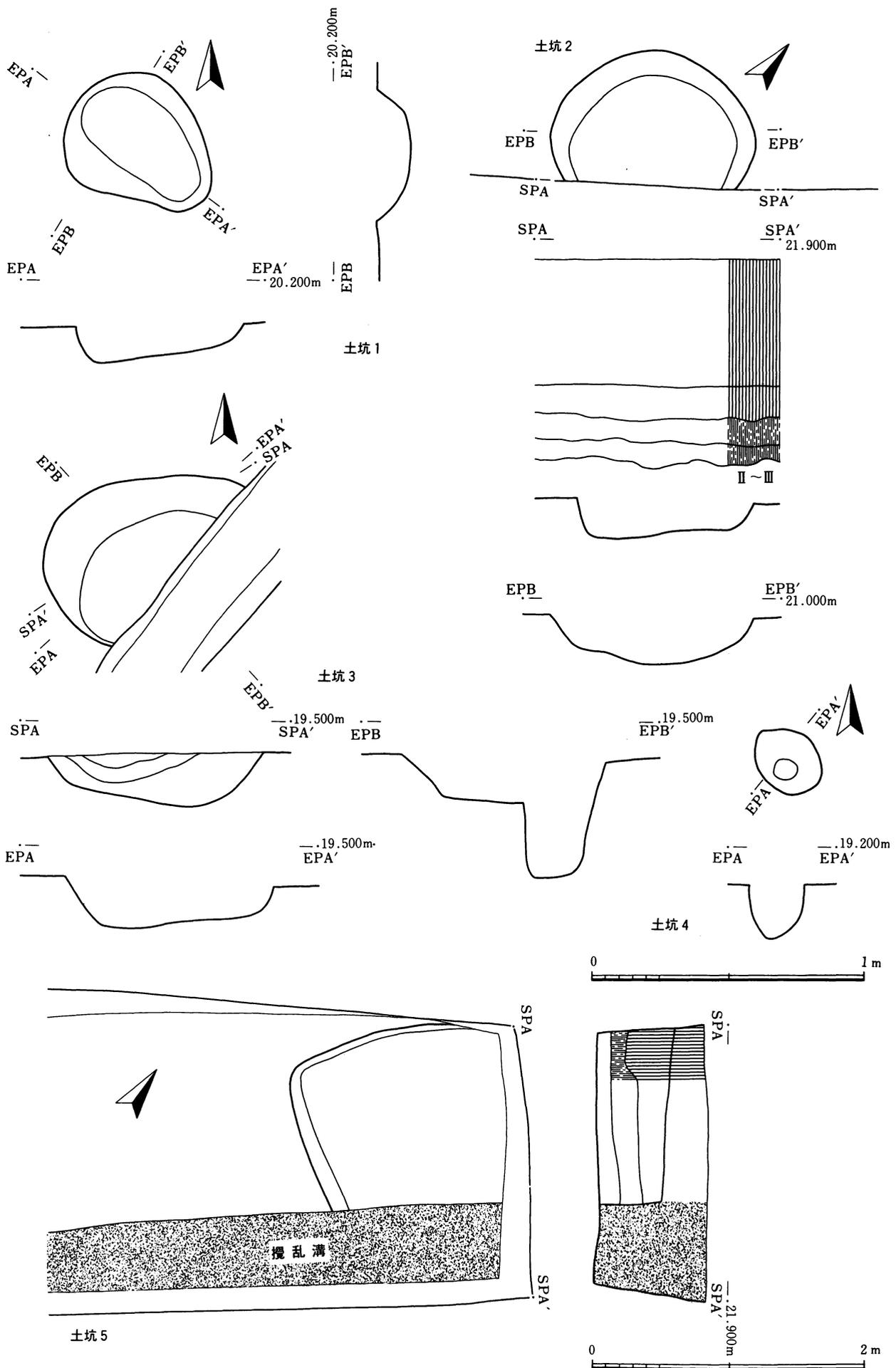
住居跡1の南側でピットの群集するエリアを検出した。そのひろがりには長さ約8mほどに及ぶ。ピットは大小20か所ほど識別できたが、調査区が狭隘であったため全体の配列を把握することはできなかった。ピットには小径で浅いものと、口径は大きいあまり深く掘り込まれていないもの(P₁、P₉、P₂₁、P₂₂など)との両者がある。覆土は何層かに細分されるが、基本的には、ソフト・ロームを混入する暗褐色土である。覆土内にはほとんど遺物は混入せず、僅かに阿玉台I b式土器破片が2点出土したに留まる。本報告においては積極的に仮設建物あるいは屋外施設の痕跡と理解しておきたい。

3 土坑 (第26図)

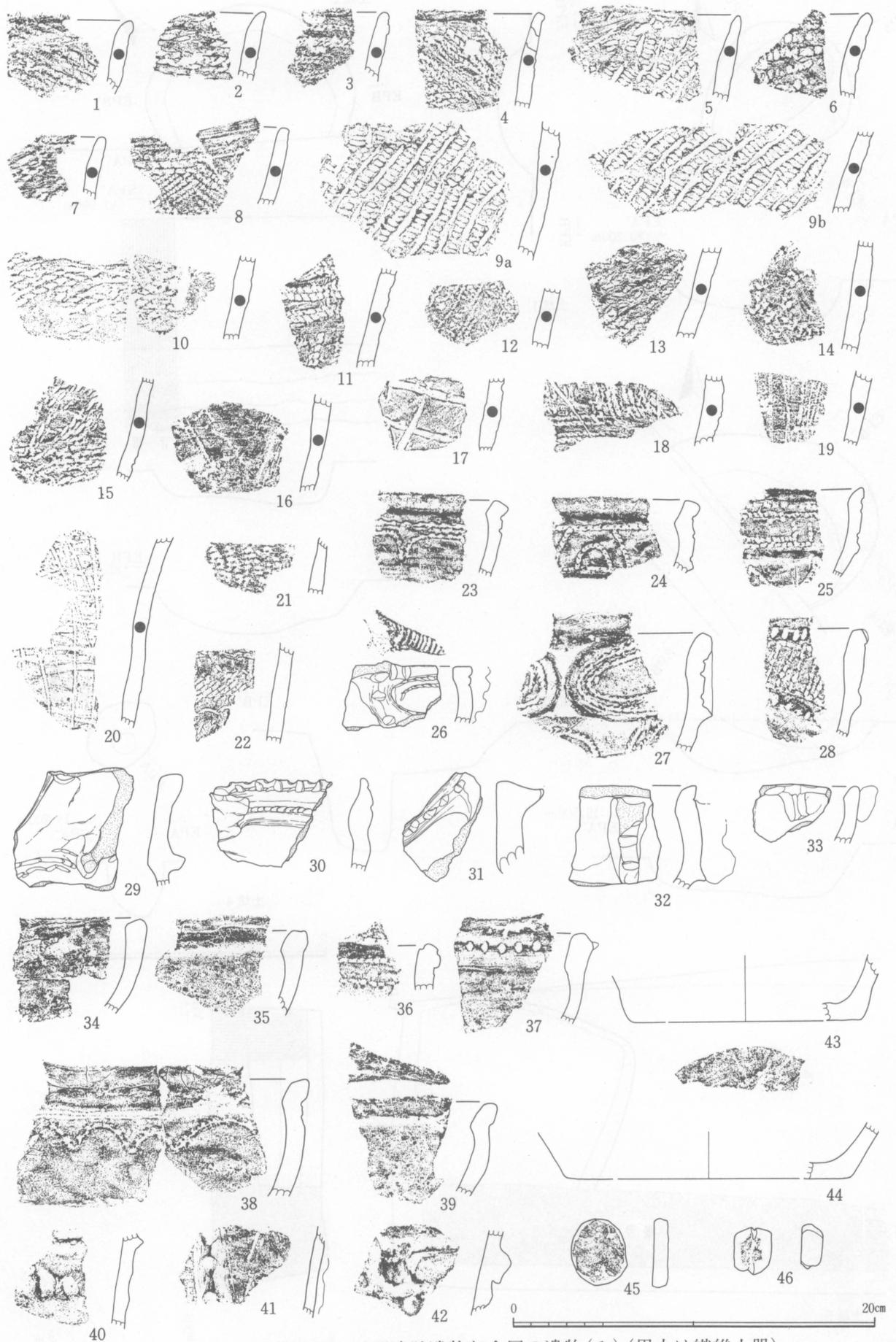
今回の調査に際しては5基の土坑を検出した。いずれも散発的なあり方をしており、広い範囲にまばらに分布する状況がうかがわれる。



第25図 道堀遺跡ピット群1平・エレベーション



第26图 道堀遺跡土坑平・断面図(土坑1~5)



第27図 道堀遺跡遺物包含層の遺物(1) (黒丸は繊維土器)

土坑1 B区にある。長軸1.2m、短軸1m、深さは検出面から0.2mある。長円形の浅い土坑であり、ソフト・ロームを混入する暗褐色土を覆土とする。遺物はない。

土坑2 E区にある。調査区南壁にあり一部が未調査範囲に及ぶ。径1.3m程の略円形の平面形をしている。掘り込みは検出面（III層中）から0.3m程であるが、本来は0.5m以上あったとみられる。覆土はソフト・ロームを多く混入する褐色土である。遺物の出土はない。

土坑3 J区にあるが、近世以降の区画溝に約半分を切られる。1.5m×0.9mの長円形をしているが、本来の規模は不明である。掘り込みは深いところで検出面から0.4mある。覆土は暗褐色を主体とするが、相当量の焼土粒が混入していた。しかし坑底に被焼成痕跡は認められず、屋外炉としても一過的な使用によるものと考えられる。遺物の出土はない。

土坑4 K区にある。径0.3mくらいの円形をしており、掘り込みも0.3mと浅い。土坑というよりも小ピット状の遺構である。覆土はソフト・ローム粒を混入する暗褐色土であり、黒浜式土器破片が2点出土している。

土坑5 Q区にある。Q区周辺は現道建設に際してローム層をかなり削平しているため遺構の検出は困難であったが、歩道部分ではII層が遺存していた。本土坑は調査区の北端部で検出されたため、一部が未調査部にはみだしている。さらに、調査区東側の埋設管工事によって損壊を受け旧態をうかがうことは困難であった。やや丸味をおびるコーナー部分を調査したが、詳細は不明である。掘り込みは浅くローム上面から0.1mで底面に達した。底面は軟弱で住居跡床面とは趣きを異にする。覆土は褐色土で遺物の出土はない。

4 遺物包含層

今回の発掘調査は路盤撤去後は原則として手掘りで掘り下げを行ったため、II層中から相当量の遺物を採集した。遺物の大半は縄文土器で、A～K各区で出土している。特にA～C区、J区での出土量が目立った。

A 縄文土器（第27・28図）

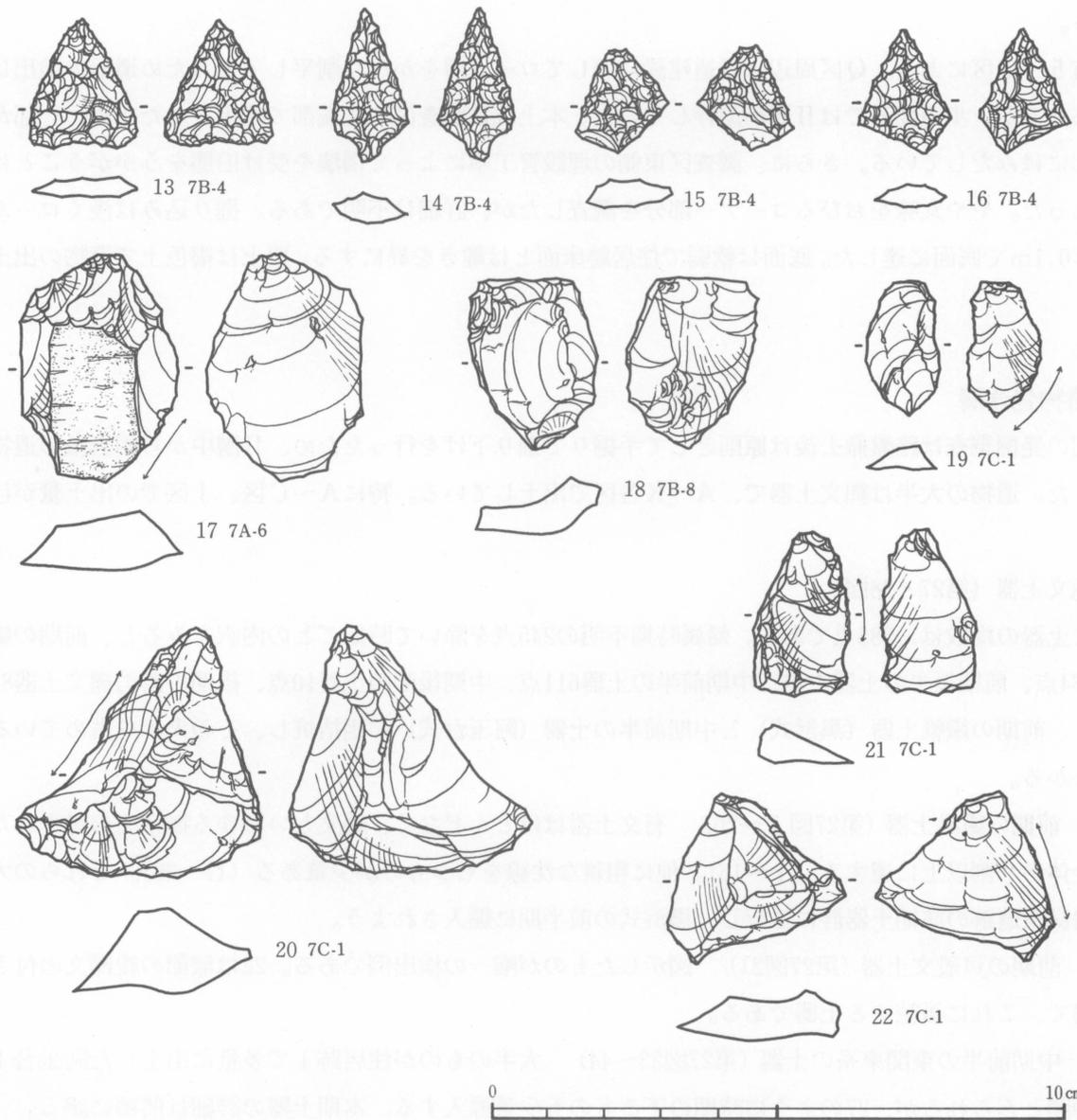
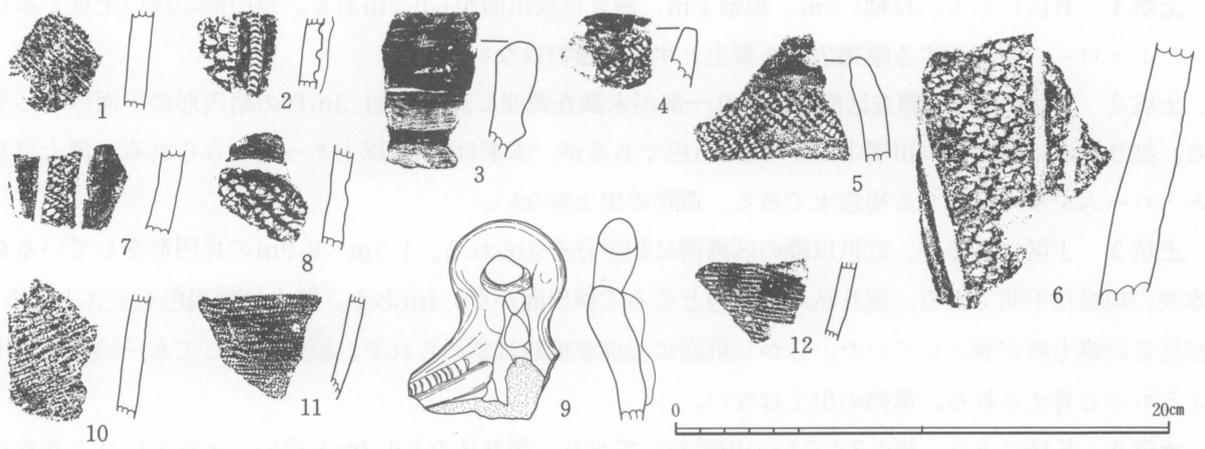
縄文土器の総数は1,585点である。帰属時期不明の245点を除いて時期ごとの内訳をみると、前期の繊維土器634点、前期後半の土器1点、中期前半の土器611点、中期後半の土器10点、後期の磨消縄文土器84点となり、前期の繊維土器（黒浜式）と中期前半の土器（阿玉台式）が相拮抗し、その大半を占めていることがわかる。

A₁ 前期の繊維土器（第27図1～20） 有文土器はほとんどなく、縄文といわゆる撚糸文の付された土器が全体の9割以上に達する（1～16）。他に粗雑な沈線をもつものが少量ある（17～20）。これらの大半は飯山満東遺跡の該期土器群に並行し、黒浜式の前半期に編入されよう。

A₂ 前期の貝殻文土器（第27図21） 図示したものが唯一の検出例である。22は無節の綾線文の付された土器で、これに後続する土器である。

A₃ 中期前半の東関東系の土器（第27図23～44） 大半のものが住居跡1で多量に出土した阿玉台I b式の仲間とみられるが、27のように時期の下るものも少量混入する。本期土器の詳細は前項に譲る。

A₄ 中期前半の西関東系の土器（第28図1・2） 2点あるにすぎない。1は砂粒を多く含み茶褐色を呈する焼成の良い土器で、浅く斜行縄文が観察される。2は小破片であるが、垂下する隆帯に沿って細密



第28図 道堀遺跡遺物包含層の遺物(2)

な爪形文列が付される。細砂粒を含みあまり焼成は良くない。

A。中期後半の土器(第28図3~7) 無文の口縁下に太目の隆帯が付されるもの(3)、口縁下に斜行縄文が付されるもの(4、5)、磨消縄文をもつ胴部破片(6、7)などがある。

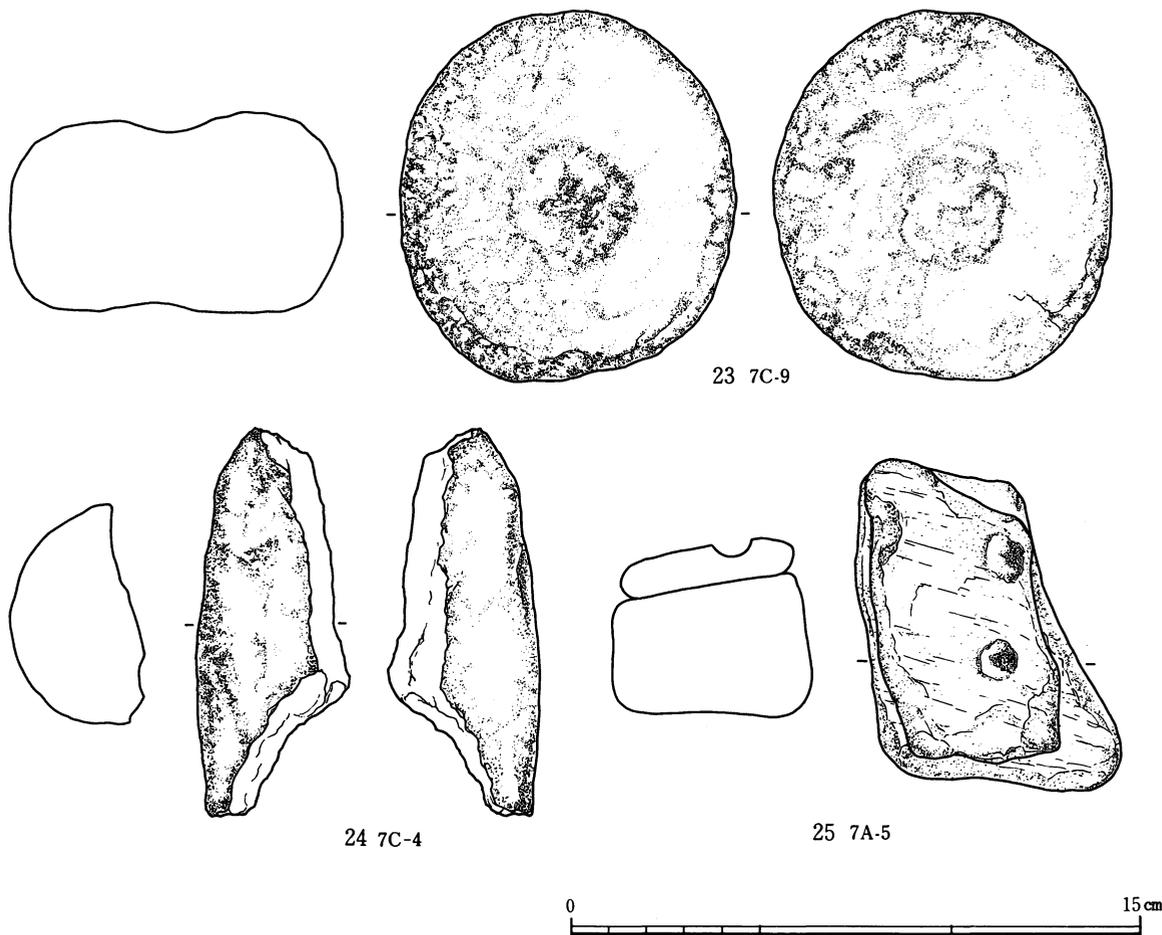
A。後期の磨消縄文土器(第28図8・9) 孤状の沈線内に縄文が配されるもの(8)、有孔把手破片(9)など後期中葉の土器が散見される。

B土製品(第27図)

円盤形土製品(45)と土器片錘(46)が1点ずつある。いずれも素材は阿玉台式土器とみられる。

C石器(第28・29図)

包含層からは礫片16点の他に52点の石器が採集されている。内訳は剝片43点、石鏃4点、円礫製処理加工具4点、石斧破片1点である。剝片の特徴は1号住居跡出土のものと同じであり、大半が黒曜石製である(第28図17~22)。このうち使用痕つきのものが5点ある(17、19~22)。5には角礫原礫面が残されている。石鏃4点はB区からまとまって出土している(第28図13~16)。特に13~15は狭い範囲からまとまって検出され、本来、一括されていた可能性がある。石質は13・14がチャート製、15・16は黒曜石製である。円礫製処理加工具は第29図に示した。23は安山岩製で両面に磨痕と被加撃による凹みがある。24も安山岩の磨石片、25は変岩製の板状礫の一面に凹みが認められる。



第29図 道堀遺跡遺物包含層の遺物(3)

第3節 弥生時代以降

弥生時代以降の遺構の検出はなかったが、ごく少量の遺物が採集されている。特にK区を中心に土器片の出土が目立った。あるいはこの周囲に該期の遺構が展開しているのかもしれない。

第28図10～12はK区採集の弥生土器である。いずれも細かい縄文が斜走～横走している。同趣の細片が他に13点ほどある。土師器片については細片ばかりであり図示していないが、古墳時代中～後期のものが36片ほどある。K区には赤彩された古墳時代中期の杯片がやや集中するところがあり、周辺を精査したが遺構の存在は捕捉できなかった。

第2章 薙 遺 跡

薙遺跡は手賀沼に流下する小支谷をへだてて道堀遺跡と対峙している。手賀沼低地と「染井入り落とし」間の分水嶺の一角を占める平坦な台地上には、縄文時代～古墳時代の遺物が広く散布している。また、この台地の手賀沼寄りには箕輪の集落がひろがり、その中央には柏方面と木下方面とを結ぶ古い往還が走っている。周知の道堀庚申塚群はこの往還にそって造営されたものである。

今回の発掘調査は調査面積が僅かに66㎡であり、薙遺跡の全容を把握するには程遠いものであったが、北側調査区から古墳時代後期の住居跡1軒を検出することができた。南側調査区は斜面にかかる肩部であったため、町道建設時にローム層まで削平されており、攪乱層中から若干の縄文早期貝殻条痕文土器細片が2点採集されたにとどまり、遺構は発見できなかった（第30図）。

住居跡1（第31図）

北側調査区は路盤直下がソフト・ローム層であったが、路盤の砂利層を除去し清掃したところ黒色土の落ち込みが検出された。調査区幅が2mであったため、当初落ち込みの性格が判然としなかったが、掘り下げをすすめると土師器細片が出土し始め、0.6mくらい掘り下げて床面と考えられる硬化面に達し、ようやくこの落ち込みが住居跡であることが確定した。

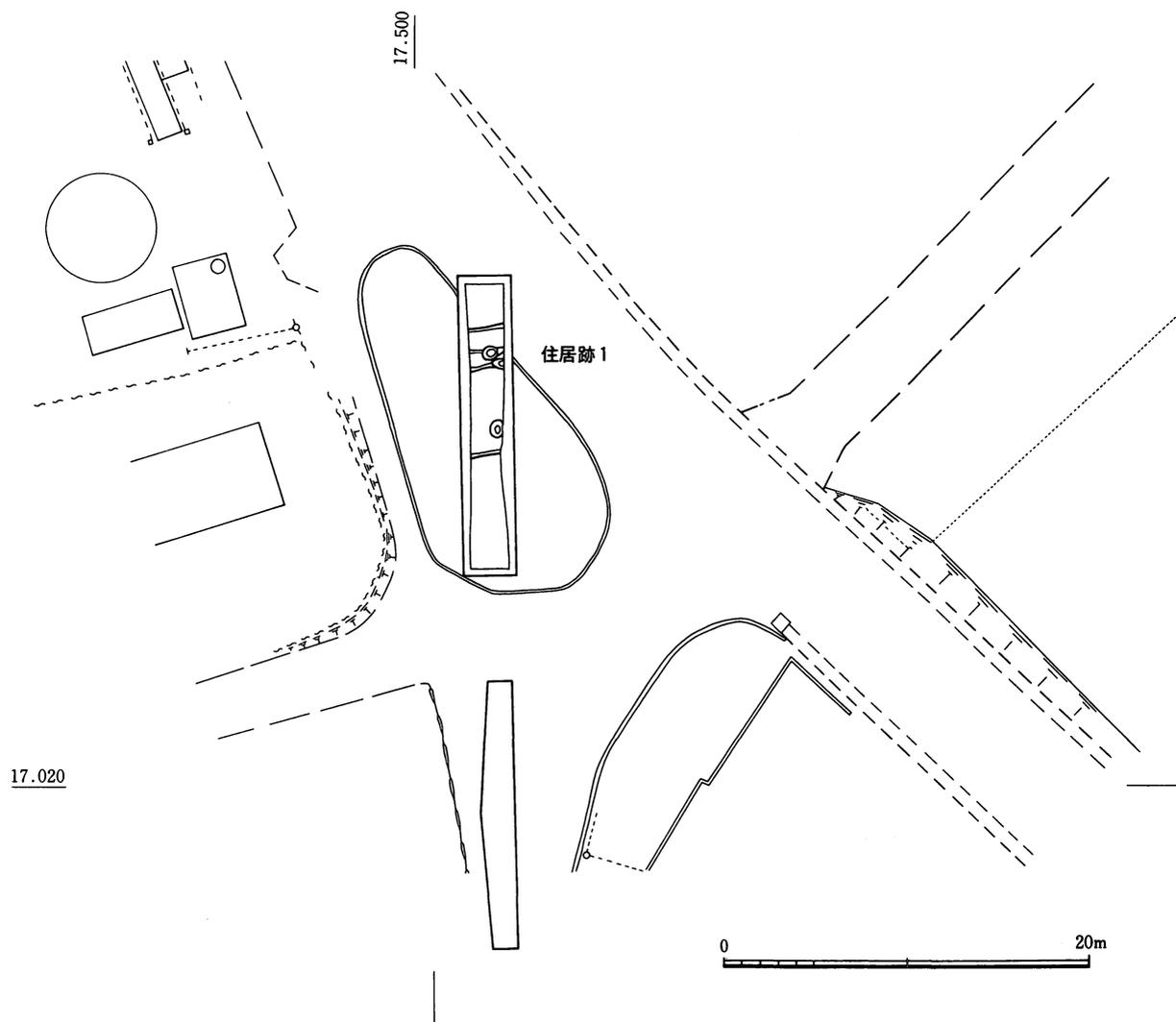
住居跡の全形は不明であるが、一辺6.9～7.0mの方形を呈するものと考えられる。検出面であるソフト・ローム層上部から床面までは北側で0.65m、南側で0.35mある。南側が浅いのはローム層が削平されているためである。

覆土は数層に細分されるが、基本的には上部が黒味の強い暗褐色土、下部が暗褐色土である。下部の暗褐色土中には土師器片がかなり含まれている。また、壁際と床面上にはローム質の明褐色土が堆積している。南壁際にはハード・ロームがブロック状に三角堆積していた。おおむね自然な埋積過程が想定される。

床面はほぼ平坦で硬化しているが、硬化度は弱く、部分的には通常のハード・ロームと区別できないところもあった。ピットは2か所に支柱穴があり（ P_1 、 P_2 ）、 P_2 に接してこれを切るピットが2か所認められたが（ P_3 、 P_4 ）、調査区外にはみ出すため、その性格はよくわからない。また P_1 、 P_2 ともに周辺から掘り込まれた形跡があり、その埋土もロームを主とする再堆積土であったことから、住居廃絶時に柱の抜き取りが行なわれた可能性が高い。柱穴縦断面の観察によっても柱根の存在を認めることはできなかった。

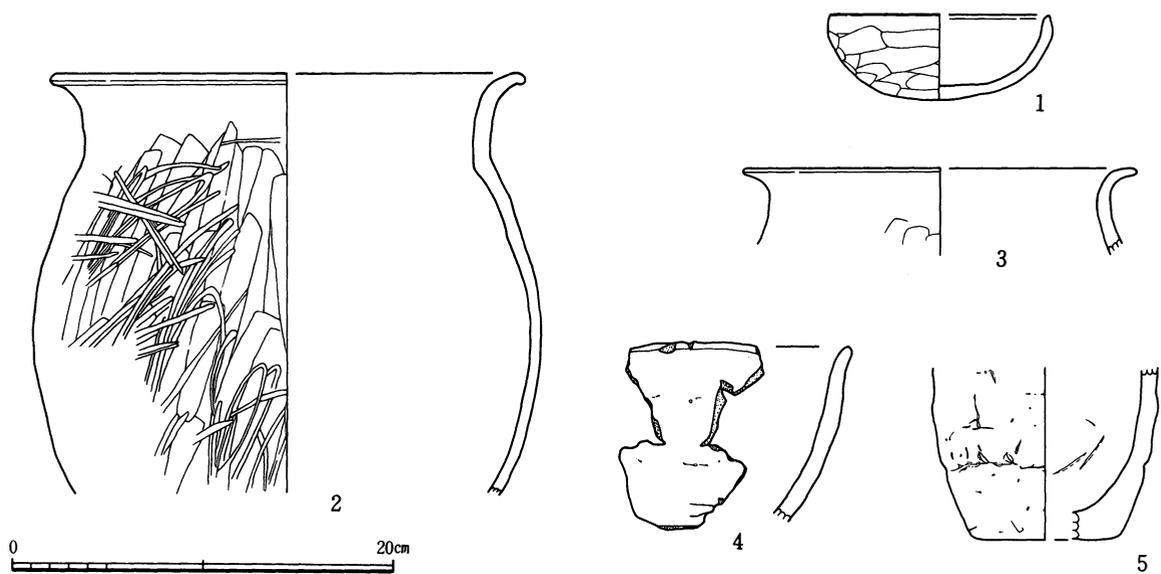
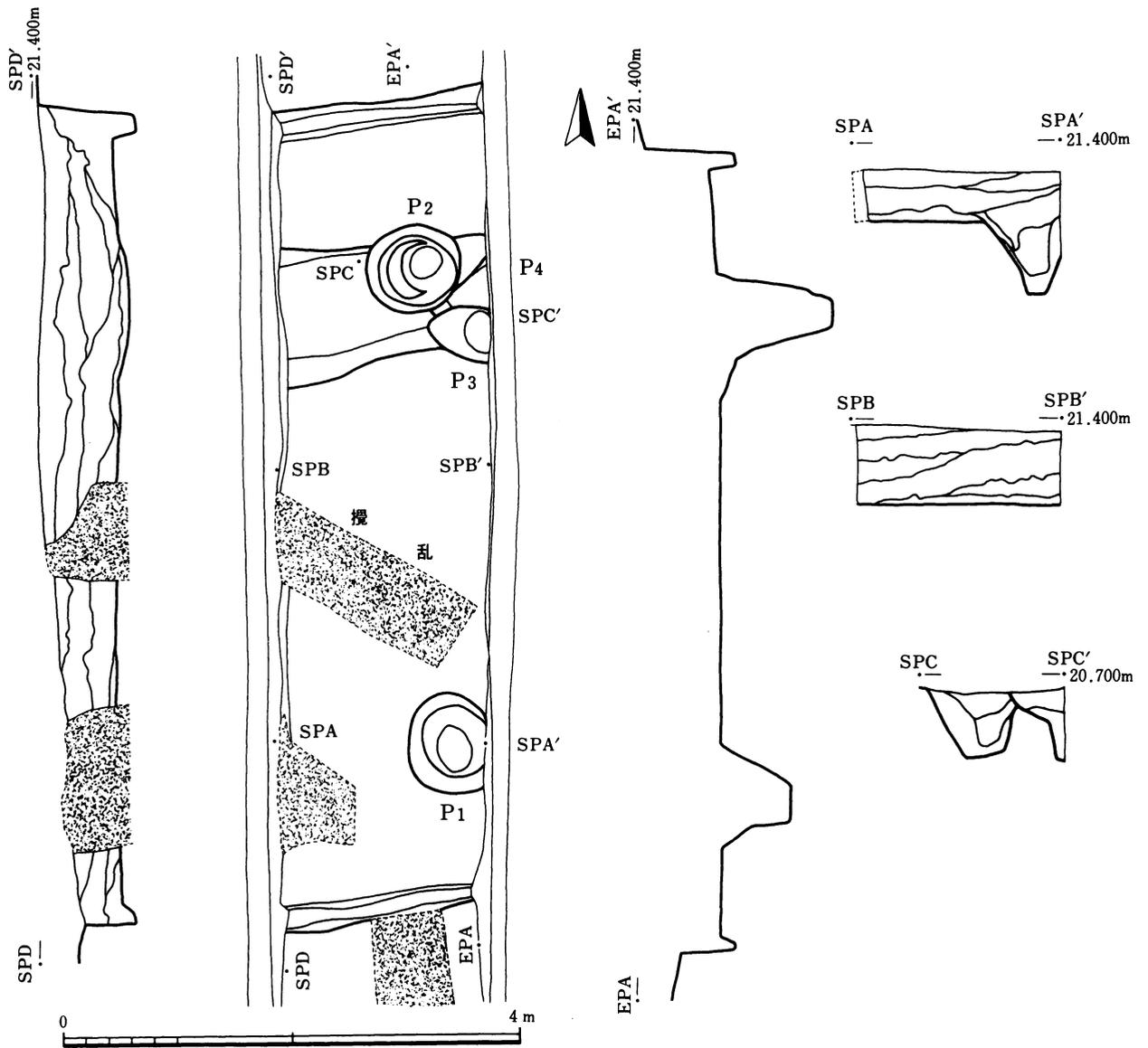
床面の一部、北壁下から約1mくらいのところに幅1m、深さ0.1mの浅い溝が壁と平行に掘られていた。 P_2 はこの溝と一部重複している。一種の区画溝、いわゆる間仕切りとみられるが、その幅の広さは異例であろう。カマドについては調査区内ではその痕跡すら検知できなかった。西側未調査区に存在するものと考えられる。また、床面と壁との接点には壁溝が掘られている。遺存の良好であった北壁下では、幅0.2m、深さ0.3mほど掘り込まれていた。

遺物は覆土下部から相当量の土師器片が採集されているが、ある程度器形のわかるものは第32図に示したものが全てである。1は南壁下床面から0.1mくらい浮いた状態で出土した土師器杯である。2～5は北壁下の床面上から出土した土師器甕である。これらの基本的整形は内面ナデと外面ケズリであるが、2で



第30図 雑遺跡全体図

はケズリの後で不規則なミガキが観察される。4と5は同一個体の可能性もあるが、内面の色調や質感が異なり、同一個体であると断定できないため別個体として実測した。別個体とした場合4の器形は図のように鉢形に近いものとなるようである。なお、土師器片とともに縄文中期後半期の土器片が若干出土している。



第31図 薙遺跡住居跡1平・断面図(上)、遺物実測図(下)

第3章 ま と め

道堀、雑遺跡の発掘調査は現道下、しかも狭隘な調査区を対象とし、加えて細分された総延長600mを超える工区を順次移動しながらすすめるという制約のもとで実施された。調査に際しては事業主体である北千葉広域水道企業団の全面的な支援を受け、ようやく予定の期間内に全ての作業を終了することが可能となった。このようないくつもの制約があったにもかかわらず、今回の調査は本地域の歴史を語る上でいくつかの重要な知見を加えることができたと言ってよいだろう。最後に調査成果を簡単にとりまとめ、全体の収束としておきたい。

(1) 従来その内容が不明であった道堀、雑遺跡の時代、性格、広がり等がある程度明確にすることができた。道堀遺跡は旧石器時代から古墳時代に及ぶ複合遺跡であり、雑遺跡も縄文、古墳時代の集落跡であることが判明した。

(2) 道堀遺跡に関しては、旧石器時代遺物集中地点が広い範囲に分布すること、また、住居跡を伴う阿玉台Ⅰb式期の集落が営まれていたことが特筆される。さらに、住居跡こそ発見されていないが、黒浜式の古い段階の土器がまとまって出土し、やはり集落の存在した可能性が高い。

(3) 道堀遺跡の旧石器時代については、第5地点Ⅶ層石器群が重要である。下総台地Ⅵ層石器群に一般的な信州系黒曜石を素材とする石刃生産地点が捕捉され、良好な接合資料が得られた。また同地点Ⅳ層からは各種石材を素材とするブロック状石核の消費を基調とする石器群が検出され、両石器群の著しい違いがあらためて問題とされた。

(4) 縄文時代についてはやはり住居跡1の調査成果が特記されよう。住居跡1は従来から決して多いとは言えない阿玉台Ⅰb式期の住居跡であり、覆土内から良好な一括資料が得られたのは何よりの収穫であった。すなわち、覆土の形成過程に従った土器の層位的出土状況が認められるとともに、覆土上層の土器群は阿玉台Ⅰb式の諸変異の大半を網羅し、当地域における該期型式の示準となりうるものである。さらに、床面検出のコハク剥片は、僅か1点という制約はあるものの、道堀遺跡におけるコハク製品の製作の可能性を強く示唆するものであると評価しえよう。

(5) 雑遺跡については調査面積が余りにも僅少であり、今回の調査においては多くの情報を得ることはできなかったが、鬼高期の大型住居跡の一部が発見され、当遺跡に該期の集落が広く展開する可能性を指摘しなければなるまい。このことは道堀遺跡に接する道堀古墳との関連をも推察させ、今後の調査の進捗に多くを期待したい。

写真図版



道堀遺跡遠景



道堀古墳



旧石器時代第5地点



住居跡 1 (西方から)



住居跡 1 (東方から)



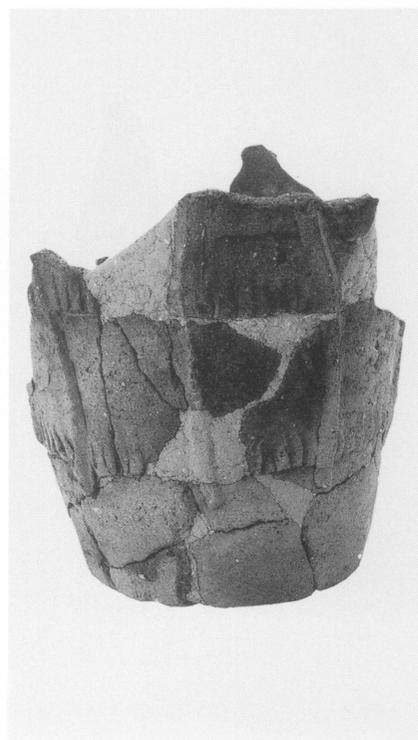
ピット群 1



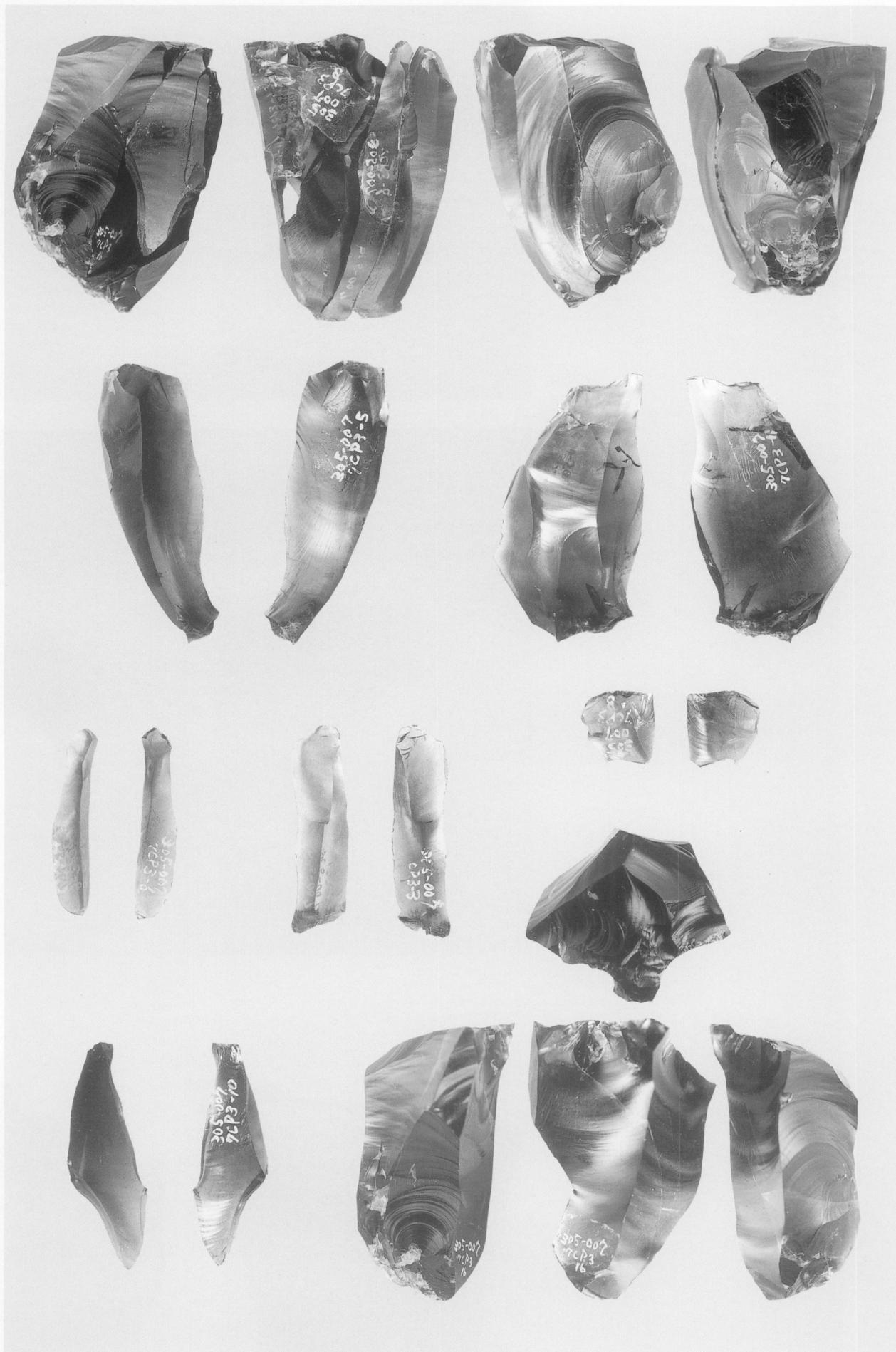
土坑2



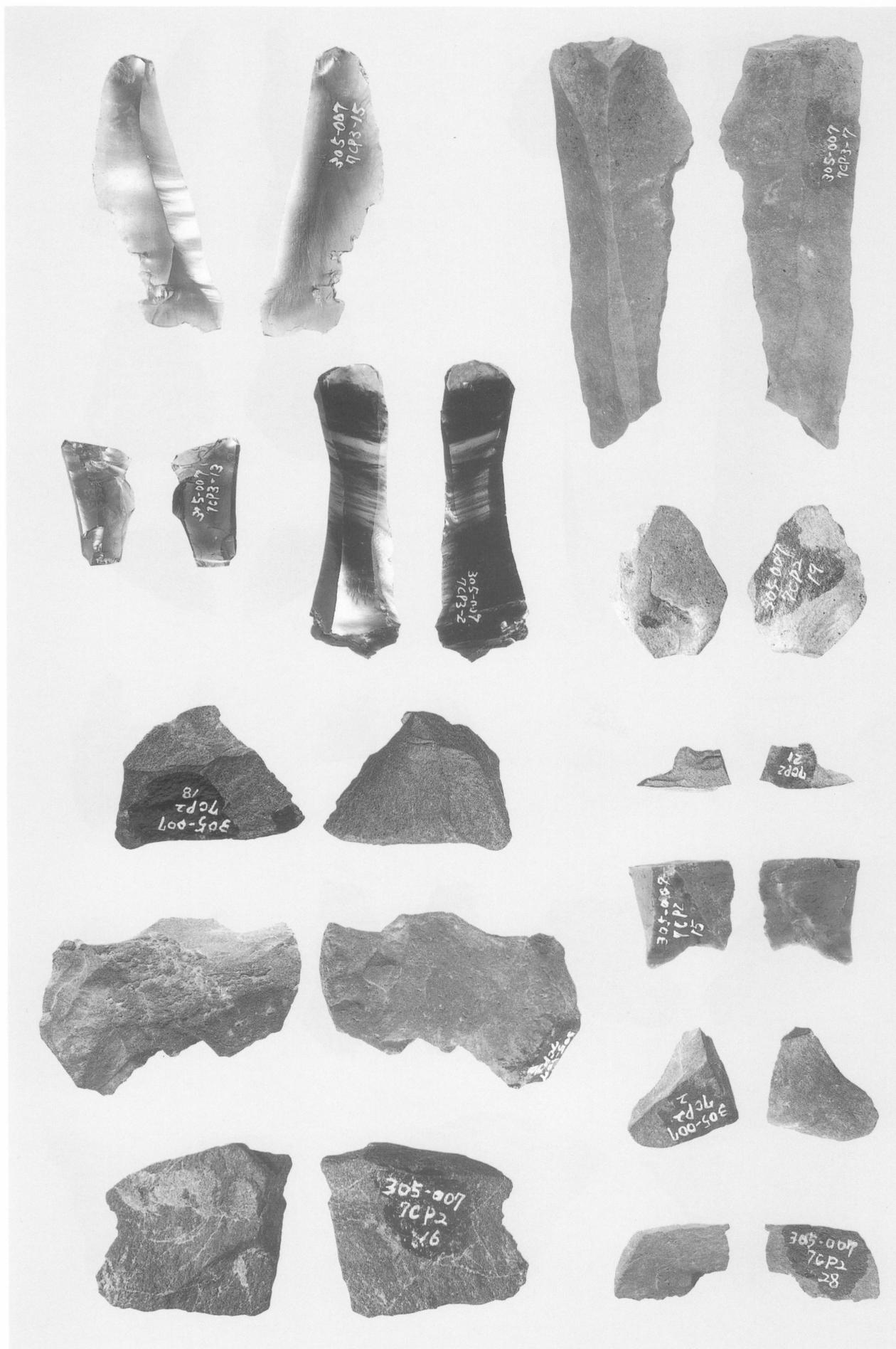
土坑3



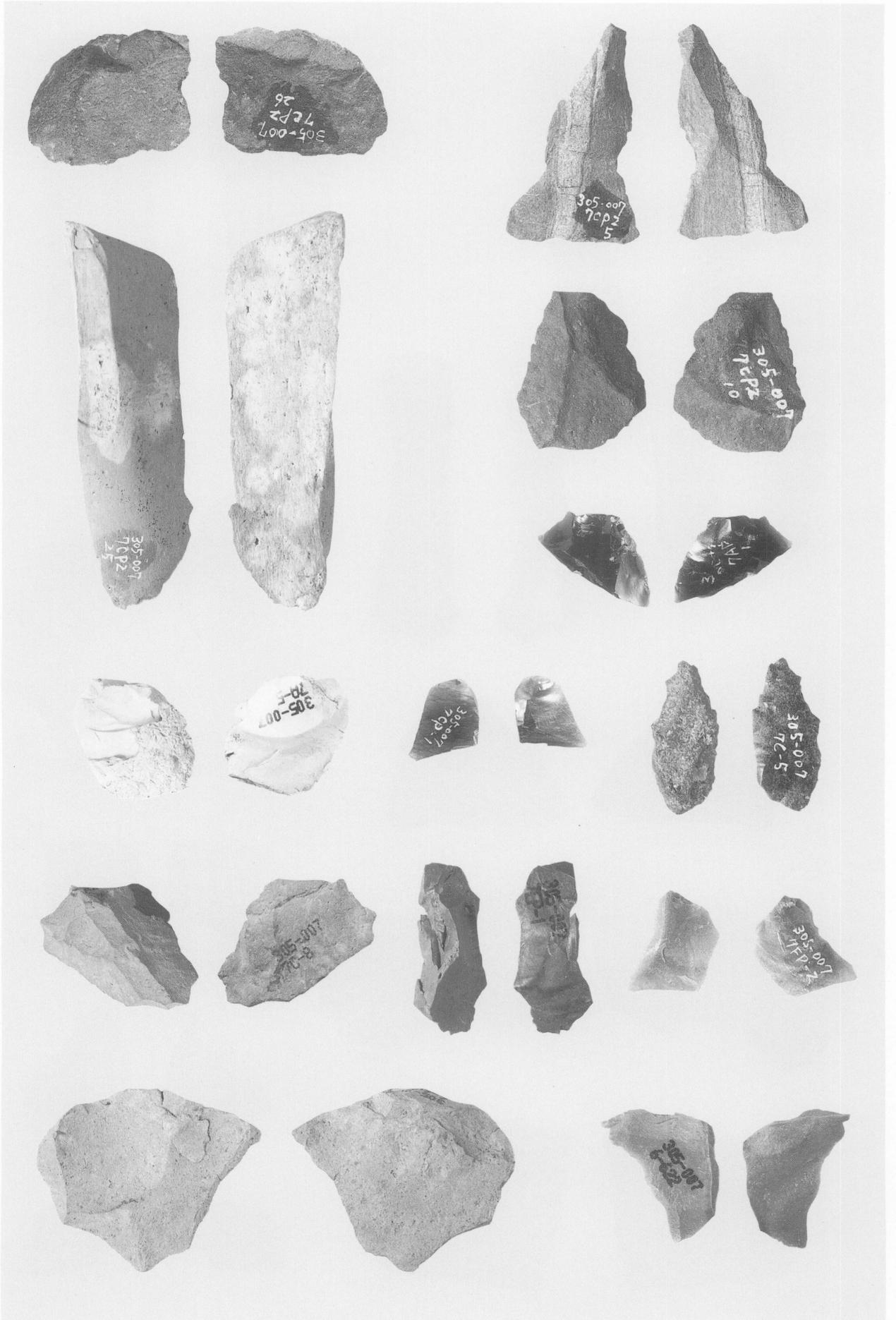
住居跡1 出土遺物(1)



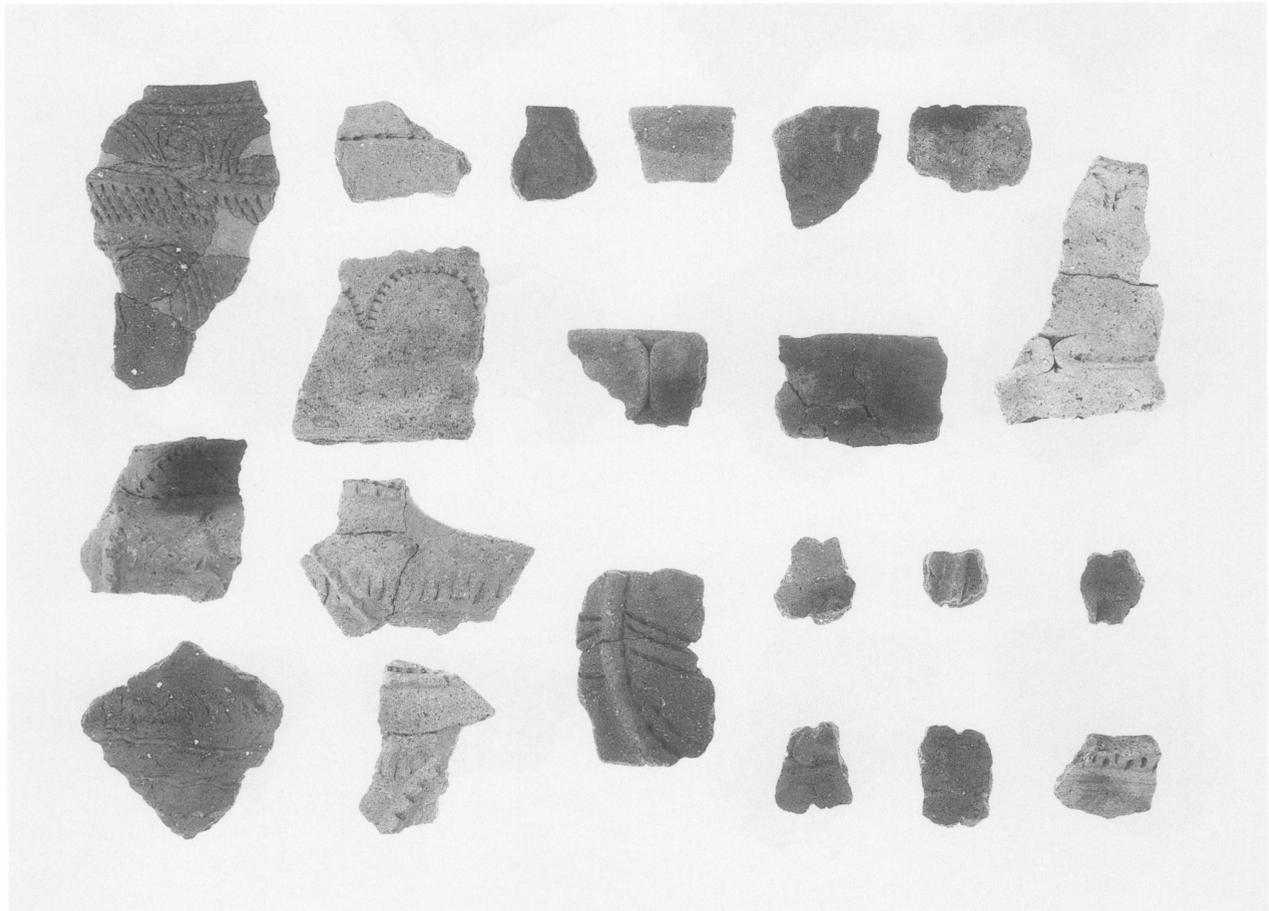
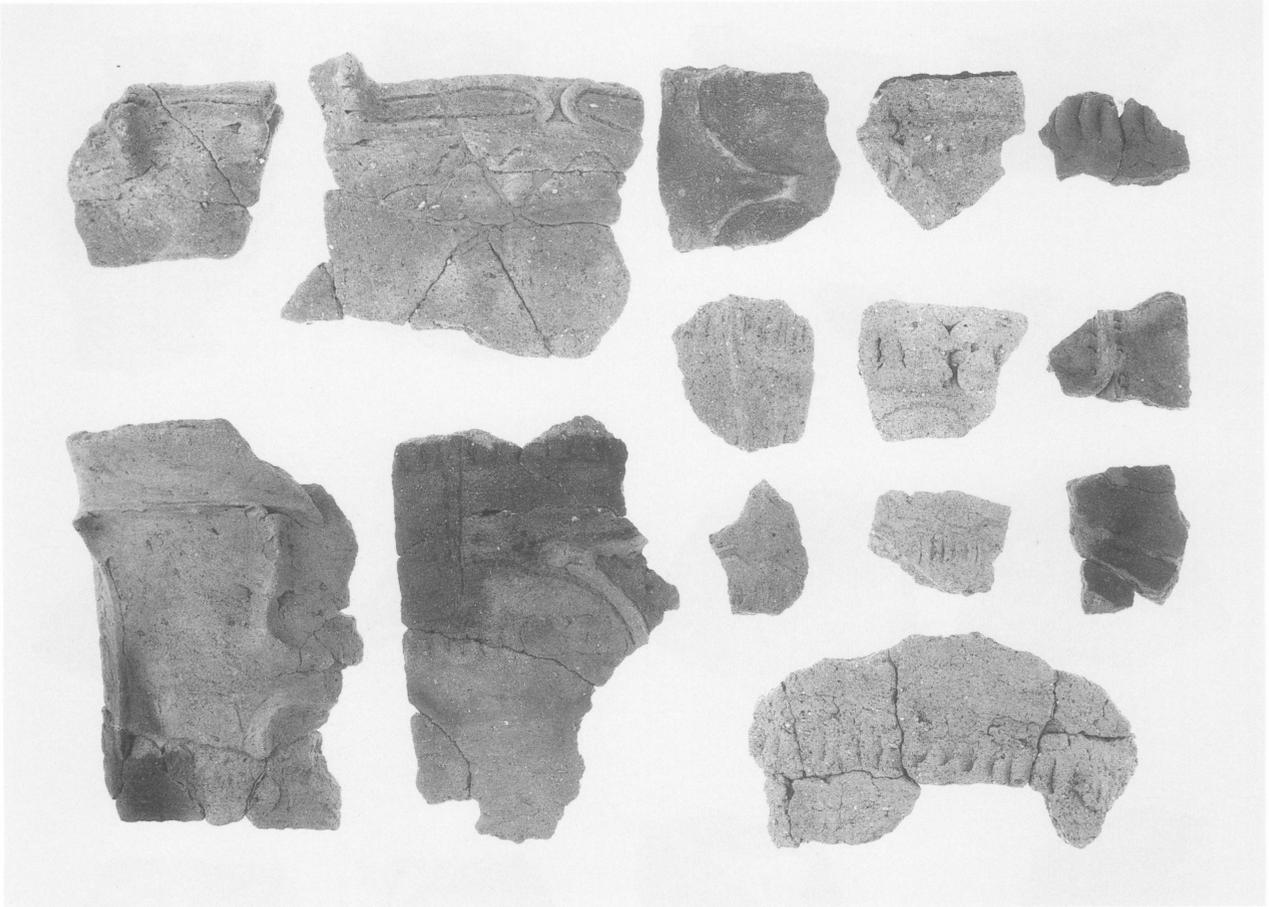
旧石器时代第5地点下層出土遺物



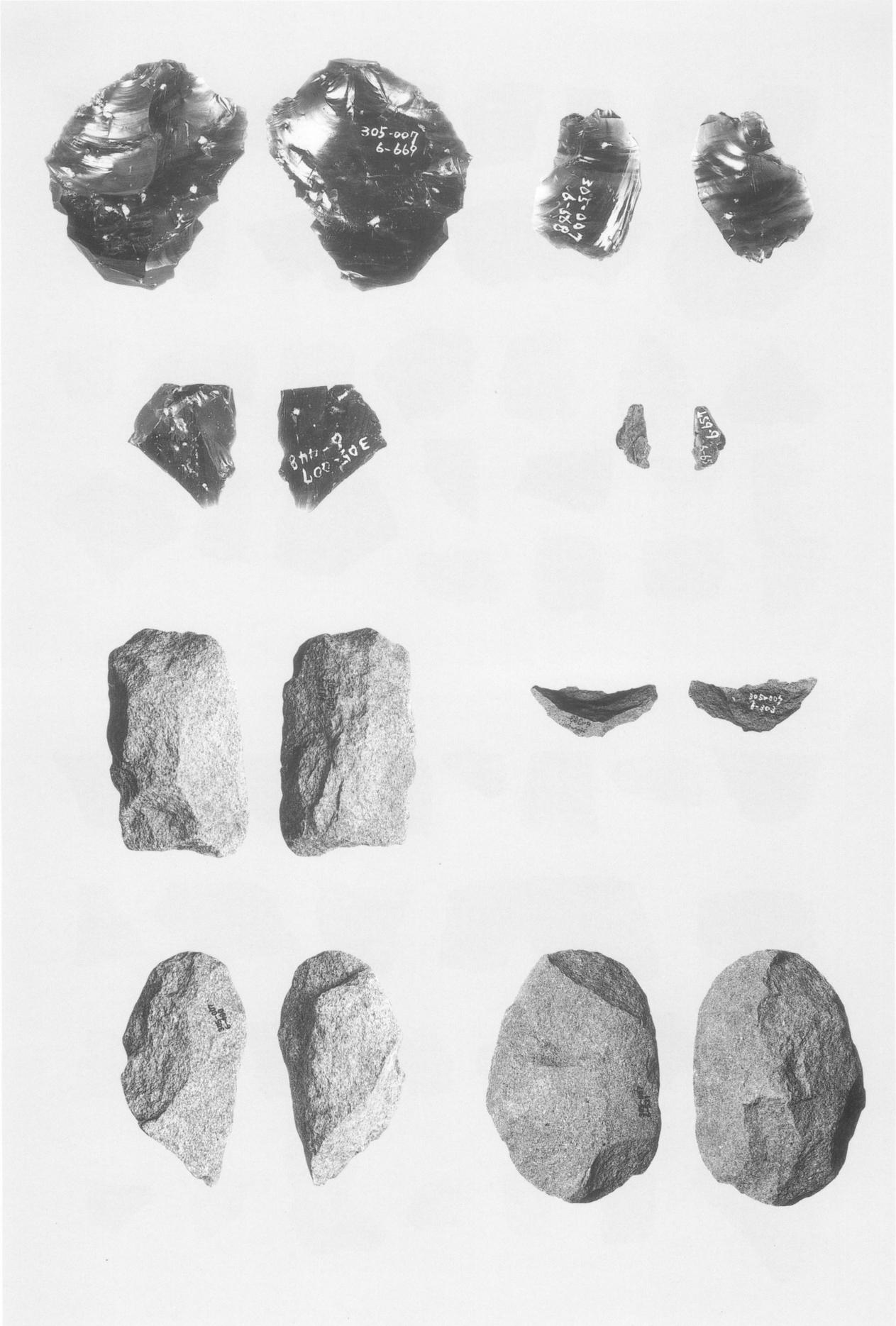
旧石器時代第5地点下層・同上層出土遺物



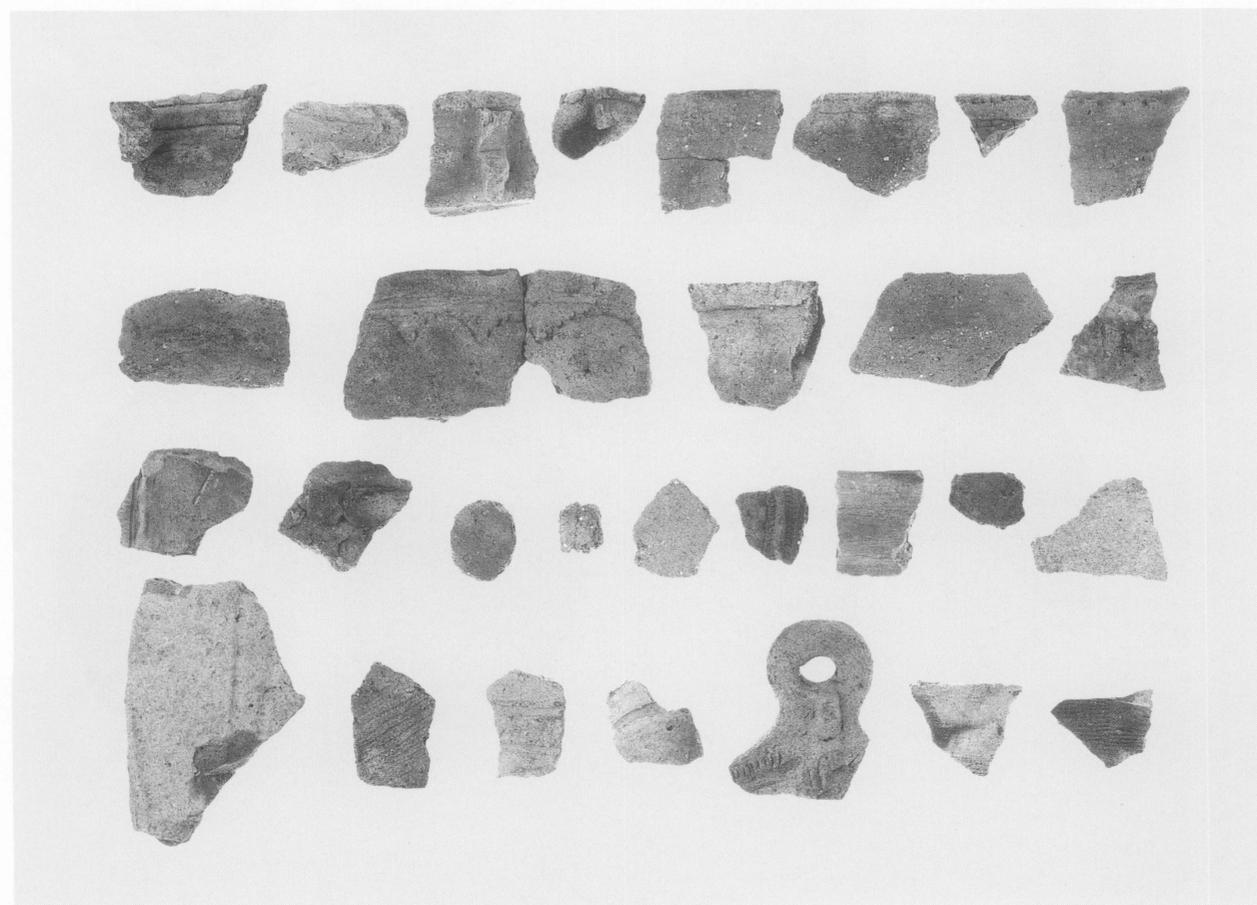
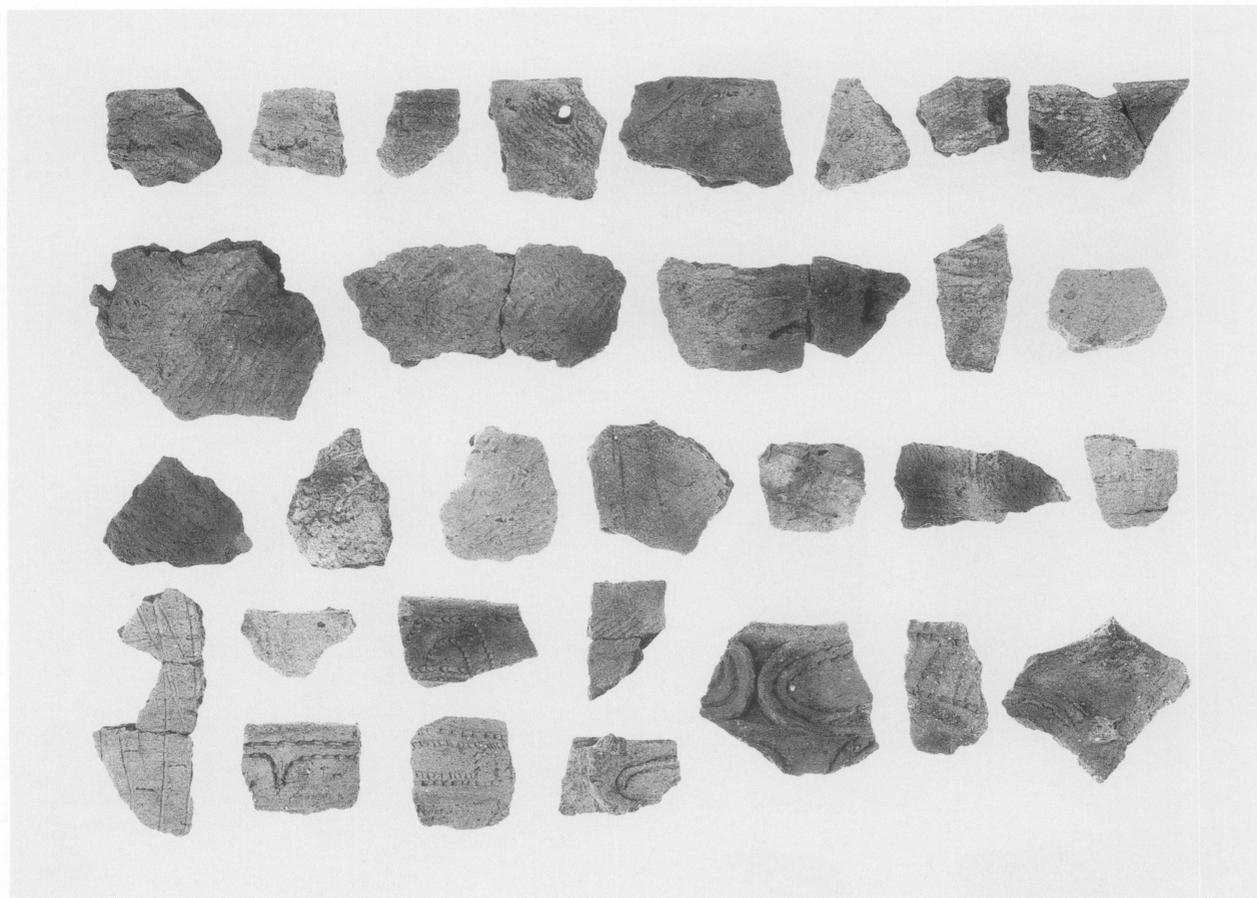
旧石器時代第5地点上層・各地点出土遺物



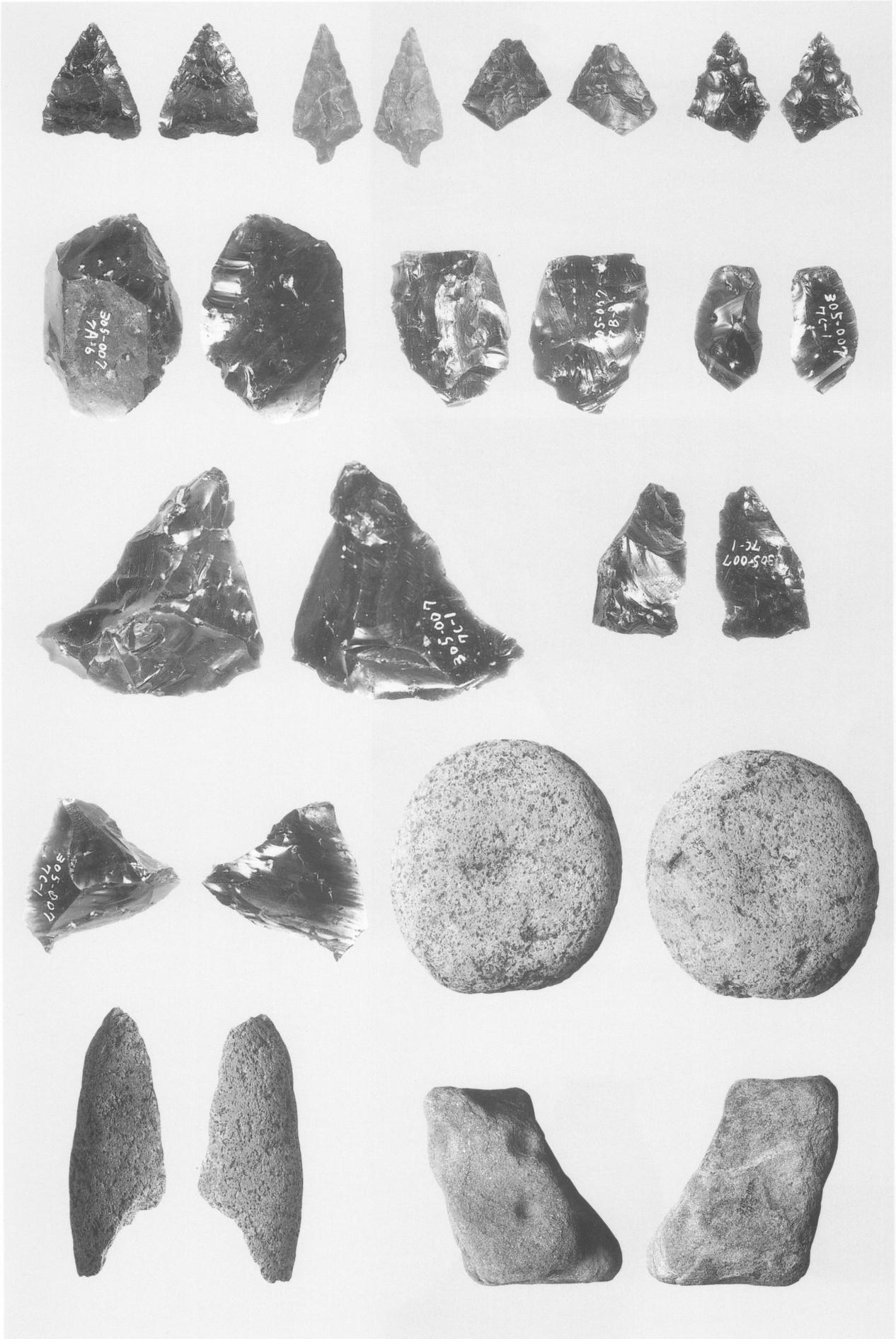
住居跡 1 出土遺物(2)



住居跡 1 出土遺物(4)



遺物包含層出土遺物(1)



遺物包含層出土遺物(2)



薙遺跡遠景



住居跡 1



住居跡 1 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しょうなんまちみちほり・なぎいせき							
書名	沼南町道堀・薙遺跡							
副書名	送水管沼南～我孫子線埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第329集							
編著者名	田村 隆							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地-2							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
道堀遺跡	千葉県東葛飾郡 沼南町岩井字道堀 258-3番地ほか	305	007	35度 50分 46秒	140度 1分 30秒	19970401～ 19970709	1,286	送水管沼南～ 我孫子線布設 工事に伴う事 前調査
薙遺跡	千葉県東葛飾郡 沼南町箕輪字薙 63-12番地先		008	35度 50分 49秒	140度 1分 40秒	19970616～ 19970709、 19971117～ 19971128	66	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道堀遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代	遺物集中地点 6か所 竪穴住居跡 1軒 ピット群 1か所 土坑 5基		旧石器時代石器、縄文土器、縄 文時代石器		旧石器時代VII層 上面石器群、阿玉 台期集落跡	
薙遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 1軒		土師器、縄文土器		古墳時代後期集 落跡	

千葉県文化財センター調査報告書第329集

送水管沼南～我孫子線埋蔵文化財調査報告書

沼南町道堀遺跡・雑遺跡

平成10年3月25日印刷

平成10年3月31日発行

発 行	北千葉広域水道企業団
編 集	財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社 エリート印刷 千葉市中央区市場町6-8
